

令和7年度 文部科学省委託事業 職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進
教職員の資質能力向上に必要な教職員研修プログラムの構築・普及・推進事業

最終報告書

一般社団法人 全国専門学校教育研究会

目次

第1章	事業開始の背景・目的	2
第2章	各年度取組内容	3
第3章	改善プロセス	4
第4章	成果分析	6
第5章	受講者成果物（ワークシート、アクションプラン等）	70
第6章	フォローアップ講座分析	73
第7章	今後の展望	75

第1章 事業開始の背景・目的

本事業は、文部科学省委託事業「職業実践専門課程等を通じた専修学校の質保証・向上の推進」の一環として、専修学校における教育の質の維持・向上を目的に開始されました。背景には、令和4年度に実施された実態調査において、専修学校の教員が実務経験には自信を持つ一方で、「**学生の理解や指導、教育に必要な知識や技能**」については**不安を感じている**という実態が浮き彫りになったことがあります。多くの専修学校教員は業界の専門家として教壇に立ちますが、教育学的な基礎知識や教授法（ティーチング、コーチング、ファシリテーション等）を体系的に学ぶ機会が不足していることが課題となっていました。

また、一般社団法人全国専門学校教育研究会が実施したアンケートによれば、約80%の学校で「授業コンサルティング（授業改善支援）」が実施されているものの、その**実施内容、持続的な方法、組織体制、頻度には大きな課題がある**ことが判明しました。具体的には、教務責任者が多忙で十分な時間が取れない、アドバイスが主観的・一般的な内容に留まる、ベテラン教員への助言が難しいといった現場特有の困難が報告されています。これらの課題を解決するため、校内で指導力向上を牽引し、若手教員等へ適切なアドバイスやサポートを行える専門人材の育成が急務となりました。

本事業の主目的は、授業の観察・評価、教員へのカウンセリングやコーチング、授業計画や教材開発の支援、および授業改善への具体的な提言ができる人材である【**授業改善サポーター**】を育成し、その養成プログラムを構築・普及させること】にあります。

「授業改善サポーター」は、単に自校の教育力を高めるだけでなく、**他校の知見も共有することで、専修学校全体における教育の質の保証と向上に寄与すること**を期待されています。本事業を通じて、自校の教員の指導力向上に向けた課題を的確に把握し、必要な研修を論理的（インストラクショナルデザイン等）に企画設計するための手順、知識、スキルを習得できるプログラムの確立を目指しています。最終的には、教育改善を個人レベルに留めず、組織レベルで推進できる体制を専修学校界全体に定着させることを目標としています。

第2章 各年度取組内容

令和5年度は、授業改善サポーターに求められる資質・要件の明確化と、暫定的な養成講座の開発に重点を置きました。

- **授業改善サポーターの要件調査の実施** 全国の加盟校123校のうち56校（64件）の教務責任者を対象としたアンケート調査と、3名の教務責任者への半構造化インタビューを実施しました。調査の結果、サポーターには「学生のレベル差への対応」「ICT活用の助言」「検定合格率向上のための指導法」など、多岐にわたるニーズに対応する能力が求められることが判明しました。
- **「暫定版」養成講座の開発と実施** 調査結果に基づき、サポーターに必要な資質を養うための3回にわたる研修プログラムを開発・実施しました。
- **リフレクションと課題把握** 講座実施後のリフレクションを通じて、受講者が自校の課題を把握し、必要な研修を設計するためのスキルの定着状況を確認しました。このプロセスにより、次年度以降のプログラム改善に向けた基礎データを収集しました。

令和6年度は、前年度の成果を基にプログラムをさらに精緻化し、より実践的な養成講座を展開しました。

- **前年度受講者への追跡調査（6ヶ月後調査）** 令和5年度の実修者15名を対象に、半年後の定着状況を調査しました。その結果、個人の指導には活かされているものの、組織的な活動への展開には「日々の業務の多忙さ」が壁になっているという実態が共有されました。
- **専修学校教員向け動画教材の開発** 養成講座の質を高めるため、専修学校の教育実態に即した専門的な動画教材を新たに開発しました。
- **「令和6年度版」養成講座の実施** オンラインと対面（福岡）を組み合わせたハイブリッド形式で、オリエンテーションおよび計3回の研修を実施しました。内容はインストラクショナルデザイン（ID）の基礎から、実際の授業改善提案、サポートツールの開発までを含む実践的な構成としました。
- **2025年度に向けた改善案の策定** 受講者からの事後アンケート（12名分）に基づき、研修の時間配分の最適化、多忙な時期を避けたスケジュール調整、Google Classroom等のツール活用によるコミュニケーション改善など、次年度に向けた具体的な課題と改善策をまとめました。また、受講者の上司を巻き込んだ組織的な支援体制の構築が今後の重要課題として提示されました。

第3章 改善プロセス

前年度までの総括と令和7年度の基本方針 令和5年度の調査により、専修学校における授業改善には「時間確保」「教員の姿勢」「指導の一般化」といった課題が明確化されました。これを受け、令和6年度はインストラクショナルデザイン（ID）に基づいた実践的な養成講座を展開し、受講者からは「他校との交流」や「事前学習の有効性」について高い評価を得ました。しかし、事後アンケートや追跡調査を通じて、「事前課題の負担感」「多忙な時期のスケジュール」「組織レベルへの普及の難しさ」といった新たな課題も浮き彫りとなりました。令和7年度は、これらの知見に基づき、受講者個人のスキル向上に留まらず、「組織的な教育改善の定着」と「学習環境の最適化」を軸とした改善プロセスを推進します。

具体的改善プロセス

研修設計とスケジュールの最適化 令和6年度は10月～12月の通常授業期間に研修が集中し、受講者の負担が過大となりました。令和7年度は以下の通り見直しました。

- **実施時期の調整**：学校業務が繁忙期を迎える時期を避け、受講者が余裕を持って集中できるスケジュールを再検討しました。その結果、研修1日目は10月7日（火）（デジタルハリウッド大学駿河台キャンパスにて対面参集型）、2日目は11月4日（火）（オンライン開催）、3日目は12月1日（月）（オンライン開催）としました。また、初日の2週間前の9月25日（木）（オンライン開催）にオリエンテーションを実施し、事前課題に取り組むための十分なリードタイムを確保しました。令和7年度の受講者数は14名でした。

- **時間配分の精緻化**：「書く時間と話す時間」が混同されていた反省を活かし、各セッションのディスカッション時間を5～10分延長します。進行指示を常時画面共有するなどの工夫により、オンライン環境下での迷走を防止しました。

教材の高度化と実践事例の充実 理論の理解を深めるため、前年度の受講者が実際に作成したツールや改善事例を教材として積極的に取り入れました。

- **時系列事例の提示**：他校での授業改善活動の結果を時系列で例示し、サポーターが直面する困難とその克服プロセスを具体化しました。

- **専門用語の平易化**：ID（インストラクショナルデザイン）等の専門概念について、定義を確認しながら進めるステップを設け、初心者でも着実に習得できる構成としました。

組織的普及に向けた管理職の巻き込み 個人レベルでの学びを組織に波及させるため、受講者の上司（教務責任者等）との連携を強化しました。

- **上司参加型オリエンテーション**：受講者対象は各専門学校の中堅教員とし、教育の質向上や教務指導に携わる方（上司）の推薦制としました。オリエンテーションでは研修目的と期待される成果を共有しました。これにより、学内での活動時間の確保や協力体制の構築を促進しました。

普及状況の追跡評価：研修終了から半年後（令和7年7月頃）に、令和6年度研修の受講者の上司を対象と

したインタビューを実施しました。「組織レベルでの普及・定着状況」を客観的に評価し、次年度以降のプログラム改善へフィードバックしました。

デジタルプラットフォームの刷新 LINE や簡易フォームに代わり、より学術的・組織的な運用に適したツールへ移行しました。

● **LMS（学習管理システム）の活用**： 熊本大学の Moodle（LMS）から（専門学校用の）ウイネット社 LMS へ移行し、受講者同士の課題提出やナレッジ共有を活性化させようとした。これは全国専門学校教育研究会全体の LMS 整備課題とも連動させ、持続可能な基盤としようとした。

期待される成果 これらの改善プロセスにより、授業改善サポーターは、単なる「助言者」から、【**自校の教育課題を論理的に分析し、組織的な解決を牽引するリーダー**】へと進化します。令和 7 年度は、個々の教員の成長を学校全体の質保証・向上へと直結させる、より実効性の高い養成プログラムの確立を目指しました。

受講者のコミュニティ化と持続的な学習・交流機会の創出

コミュニティ形成の重要性と背景 本事業で育成する「授業改善サポーター」は、自校の知見に留まらず、他校の知見も共有することで効果的かつ質の高い教育を実施することが期待されています。令和 6 年度を受講者アンケートでは、「他校の先生と意見交換できたことが非常に貴重だった」「同じ悩みを持つ者同士で会話がしやすい」といった声が多く寄せられ、校外のネットワークが受講者のモチベーション維持や新たなアイデア創出に寄与していることが確認されました。一方で、研修期間終了後は「日々の業務に追われ、他校との交流が途絶えてしまう」という課題も浮き彫りになっています。これらを踏まえ、令和 7 年度は研修期間中だけでなく、終了後も持続的に相談・支援し合える「サポーター・コミュニティ」の構築を重点施策として推進しました。

デジタルプラットフォームを活用した常設型交流基盤の整備 従来の LINE グループや簡易的な掲示板によるコミュニケーションに加え、より組織的かつ学術的なナレッジ共有が可能なプラットフォーム（Facebook グループ）へ移行しました。

● **非同期型コミュニケーションの活性化**： 研修期間外でも、各種情報共有や現場で直面した具体的な課題（学生対応や ICT 活用等）を実名で相談できるスレッド（Facebook グループ）を設置し、サポーター同士が知恵を出し合える環境を維持しました。具体的には、受講者の中から 1 名「コミュニティリーダー（受講者間の交流と実践共有を促す推進役）」を任命し、役割を担ってもらいました。

研修終了後のフォローアップと実践報告会の実施 計 3 回の研修で完結させず、実践の定着を確認するためのフォローアップ体制を構築しました。令和 7 年度を受講者だけでなく過去の受講者も含めたフォローアップ講座を開催しました。学びをさらに深め、仲間との交流を深めました。同じ志を持つ仲間との意見交換や情報共有を通じて、新たな気づきやつながりを得られる機会となりました。

期待される成果 これらのコミュニティ化施策により、受講者は研修終了後も「授業改善サポーター」としてのアイデンティティを保持し、専修学校界全体で教育の質を底上げするための「持続的な学習組織」の中核を担うことが可能です。

第4章 成果分析

令和7年度の授業改善サポーター養成講座の内容

研修1日目の前に、令和7年9月25日（木）15:30-16:30（オンライン開催）で、研修概要、事前課題、学習管理システム（LMS）の使い方の説明を実施しました。

研修1: (対面：3時間) 授業改善サポーターの基礎

令和7年10月7日（火）15:00-18:00 デジタルハリウッド大学駿河台キャンパスにて開催

終了後：交流会

時間配分	内容	ポイント
15:00-15:10	・自己紹介 ・研修説明	・自己紹介で本研修に期待することを共有する ・研修の内容、流れ、目標を紹介する ・コミュニケーションツールの活用方法の説明をする
15:10-16:00	・セッション1: 授業シラバスの改善提案	・研修1の事前課題③を使い、授業シラバスをIDで検証する方法を議論する ・IDの基礎について復習する機会を提供する
16:00-17:00	・セッション2: 授業をより良くするための具体的な提案	・研修1の事前課題②について、ジグソー法を用い、観点を共有する ・セッション1のシラバスへの提案を更に検討する
17:05-17:50	・自校での授業コンサルテーション普及のための施策の検討	・研修1の事前課題①を用い、自校での強み、改善点などを確認し、組織への提案、個人でやるべきことを検討
17:50-18:00	・アクションプランの作成	・本研修の振り返りをしながら、自校組織への働きかけ、(1)個人でのアクションを、(2)授業コンサルティング普及への施策、(3)授業改善サポーター業務、自身の知識・スキル開発の3項から、計画を立てる

研修 2: (オンライン : 3 時間) 授業改善サポーター業務の実践と省察(1)**令和 7 年 11 月 4 日 (火) 14:00-17:00 オンライン開催**

時間配分	内容	ポイント
14:00-15:30	・セッション 1(グループワーク): 授業改善サポーター業務報告の共有(授業改善)	・研修 2 の事前課題②について、ジグソー法を用い、観点を共有する(研修 1 とは違うメンバで実施) ・授業改善サポーター業務報告を共有し、より良い授業改善方法があったかを議論する
15:30-16:30	・セッション 2(グループワーク): 授業改善サポーター業務報告の共有(普及活動)	・研修 1 の事後課題①を共有し、普及活動での課題や問題、解決方法を議論する
16:30-17:50	・全体議論 授業改善についての議論、授業コンサルティング普及についての議論	・セッション 1 と 2 を踏まえ、全体で更に議論 ・コミュニケーションツール (Facebook グループ) の投稿を確認し、コミュニティの活性化について検討
15:50-16:00	・アクションプランの作成	・本研修の振り返りをしながら、自校組織への働きかけ、(1)個人でのアクションを、(2)授業コンサルティング普及への施策、(3)授業改善サポーター業務、自身の知識・スキル開発の 3 項から、計画を立てる

研修 3: (オンライン : 3 時間) 授業改善サポーター業務の実践と省察(2)**令和 7 年 12 月 1 日 (月) 14:00-17:00 オンライン開催**

時間配分	内容	ポイント
14:00-15:00	・セッション 1(グループワーク): 授業改善サポーター業務報告の共有(授業改善)	・研修 3 の事前課題②について、ジグソー法を用い、観点を共有する(研修 1 とは違うメンバで実施) ・授業改善サポーター業務報告を共有し、より良い授業改善方法があったかを議論する
15:00-15:30	・セッション 2(G ワーク): 授業改善サポーター業務報告の共有(普及活動)	・研修 2 の事後課題①を共有し、普及活動での課題や問題、解決方法を議論する
15:30-16:30	・セッション 3(G ワーク) 自校における授業見学評価用チェックシートの作成	・自校の授業見学評価シートの共有、使いやすさ、妥当性、信頼性の観点から検討する
16:30-16:50	・セッション 4(全体議論): 研修全体の振り返り	・セッション 1,2,3 を踏まえ、全体で更に議論 ・コミュニケーションツール (Facebook) の投稿を確認し、コミュニティの活性化について検討 ・3 回の一連の研修の振り返りを行う
16:50-17:00	・アクションプランの作成	・本研修および 3 回の研修の振り返りをしながら、自校組織への働きかけ、(1)個人でのアクションを、(2)授業コンサルティング普及への施策、(3)授業改善サポーター業務、自身の知識・スキル開発の 3 項から、計画を立てる

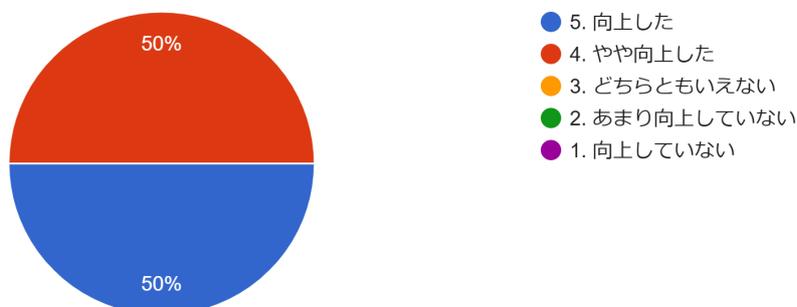
研修 3 日目終了後に、令和 8 年 1 月 9 日 (金) 16:00-17:30 (デジタルハリウッド大学駿河台キャンパスにて対面参集型) でフォローアップ講座を実施しました。武蔵野大学鈴木教授、熊本大学合田教授をお招きして、授業改善に関するディスカッション、情報共有の機会を設けました。

令和 6 年度、7 年度の受講者の上司アンケート結果・分析

過去の受講者のパフォーマンスの現状調査も参考にして、令和 7 年度研修の改善を行いました。

1-a. あなたの部下がこの講座を受講して、教育の質は向上したと思いますか？

6 件の回答



選択肢	件数	割合
5. 向上した	3	50%
4. やや向上した	3	50%
3 以下	0	0%

本講座受講後の教育の質向上について、管理職 6 名から回答を得た結果、「向上した」50%、「やや向上した」50%となり、否定的・中立的回答は 0%でありました。平均評価は 4.5（5 段階）と高水準であり、全回答者が教育の質向上を実感していることが確認されました。一方で、「非常に向上」との評価は半数に留まっており、今後は成果の定量的可視化や具体的事例共有を強化することで、さらなる満足度向上と評価の再現性確保が期待されます。

研修中および研修後、組織として受講者に対してどのようなサポートを行いましたか？

組織的サポートは①体制整備（教育の質向上係の設置、全体会議での共有）、②進捗管理（事前目標設定・途中報告・助言）、③成果展開（研修後ヒアリング、全体プロジェクト化）、④実務支援（授業日程調整・旅費支給）、⑤改善循環（カリキュラム改善の意見聴取）の 5 類型に整理できる。単発研修に留めず、組織実装まで踏み込んでいる点が特徴がありました。示唆としては、成果を左右するのは「個人の受講」よりも「組織的伴走と制度化」であり、今後は支援内容の標準モデル化と成果指標の明確化により再現性を高めることが重要です。

今後、受講者の活動を支援するために、どのような組織的なサポートが必要だとお考えですか？

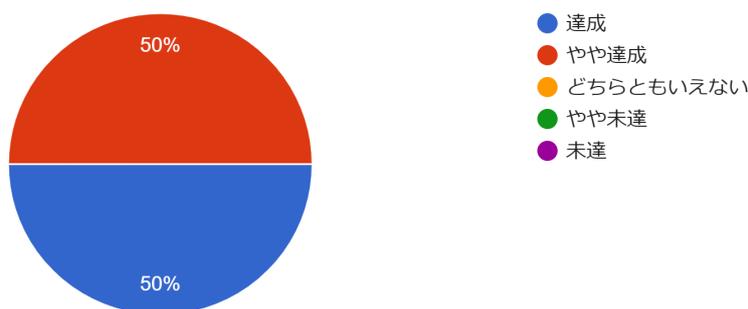
回答は①評価制度の構築（質向上活動を可視化・評価）、②効果測定と横展開（成果の検証と他校への橋渡し）、③推進役の明確化（中心担当の設置）、④実務支援（日程調整・旅費支給）、⑤校内共有の場づくり（アウトプット機会創出）の 5 領域に整理できる。共通する論点は「個人の努力を組織成果へ転換する仕組み化」である。示唆として、成果指標の明確化→校内発表→評価反映→横展開という循環モデルを設計することで、持続性と波及効果を高められる。

部下をこの講座に派遣した際、どのような成果を期待していましたか？

回答は①他校交流による視野拡張と主体的実践、②授業設計・評価観の高度化、③学生理解度の向上、④学校全体への波及、⑤リーダーとしての牽引役の発揮、の 5 点に整理できます。単なるスキル習得ではなく、「個の成長を組織変革へ接続すること」が共通期待としてありました。示唆として、本講座は実践知の獲得に加え、影響力発揮・横展開設計まで支援するプログラム設計が求められます。成果指標も「個人の授業改善」に加え「校内波及度」で測ることが重要です。

3-b. 実際に受講後、その期待はどの程度達成されたと思いますか？

6 件の回答



選択肢	件数	割合
達成	3	50%
やや達成	3	50%
どちらともいえない以下	0	0%

本講座受講後の期待達成度について、管理職 6 名から回答を得た結果、「達成」50%、「やや達成」50%となり、未達・中立的回答は 0%でありました。平均評価は 4.5（5 段階相当）と高水準であり、全回答者が当初の期待が概ね実現したと認識していることが確認されました。事前期待との大きな乖離は見られず、講座内容と実践成果の整合性は高いと評価できます。一方で、完全達成は半数にとどまっており、成果の可視化や組織的展開支援を強化することで、更なる満足度向上が期待されます。

この講座を今後さらに改善するとしたら、どのような点が挙げられますか？

回答は①修了後コミュニティ形成と成果発表機会の強化、②事前課題の負担軽減と効率化、③教学マネジメントや法人内合意形成スキルの拡充、④レポート等フォロー負担の適正化、⑤継続研修と校内連携強化支援の必要性に整理できます。共通課題は「学習効果の維持」と「実装段階の伴走支援」です。示唆として、事前学習の最適化→本研修→修了後コミュニティ+成果共有会→継続支援という段階設計を明確化し、負担と成果のバランスを取ることが質向上の鍵となります。

受講者が作成した成果物（授業改善報告書など）は、組織内でどのように活用されているか？

回答は①授業アンケート等の実務改善への活用、②学内会議での共有・報告会実施、③教学マネジメント様式への

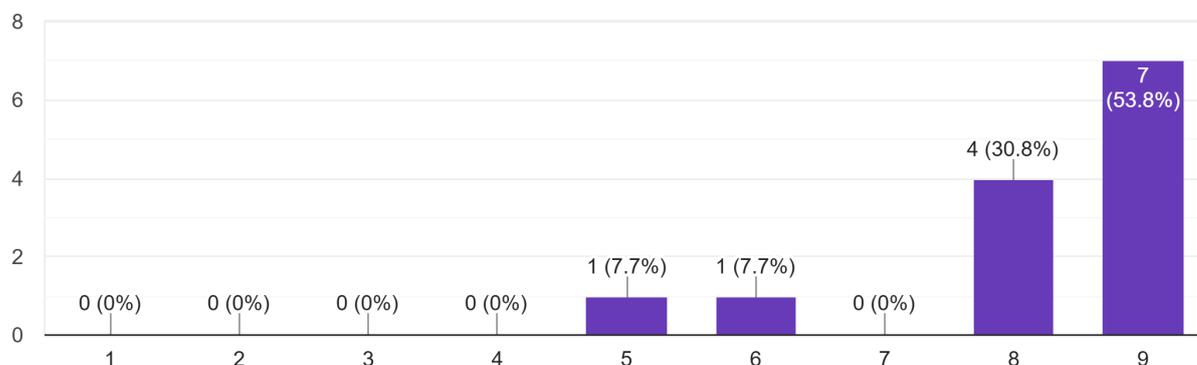
反映検討、④情報共有に留まる段階、⑤成果物未形成だが議論活性化、の 5 類型に整理できます。現状は「共有・意識変容」段階が中心で、制度化・標準化への接続は途上といえます。示唆として、成果物を評価指標や教学 PDCA に組み込み、共通フォーマット化することで、個人の実践を組織資産へ転換する設計が重要です。

成果物を組織内で活用するために、どのような工夫が必要だと考えますか？

回答は①推進担当への発信機会付与、②授業評価改善の必要性の共有と自分ごと化、③教育力向上ビジョンの共有、④講座内容の周知徹底、⑤相互モニタリングやフィードバック体制構築の 5 点に整理できます。共通課題は「成果物を理念と行動に接続する仕組み化」です。示唆として、成果物提示→現状課題の可視化→改善ロードマップ提示→相互観察・評価循環というプロセスを設計し、個人実践を組織文化へ転換する工夫が必要です。

研修 1 日目（令和 7 年 10 月 7 日火曜日 15:00-18:00 デジタルハリウッド大学駿河台キャンパスにて対面 参集型）のアンケート結果・分析

この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのくらい近い印象を持ちま...（1...つまらなかった、9...おもしろかった）
13 件の回答



指標	数値
平均値	8.15
中央値	8
最頻値	9
標準偏差	約 1.14

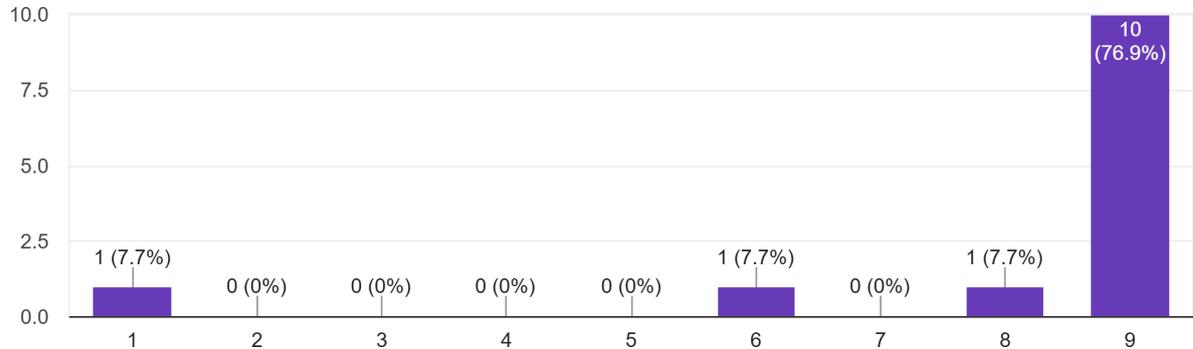
8 以上の割合 **84.6% (11/13 名)**

7 以下の割合 **15.4% (2/13 名)**

1~4 の割合 **0%**

本研修の満足度は 9 段階評価で平均 8.15、中央値 8 と非常に高い水準となりました。回答者 13 名中 11 名（84.6%）が 8 以上を選択し、うち 7 名（53.8%）が最高評価の 9 を付けています。1~4 の低評価はゼロで、全体として高い満足度と安定した評価傾向が確認されました。一方で 5・6 評価が各 1 名（計 15.4%）存在し、時間配分や事例共有の深度向上などに改善余地が示唆されます。総じて、本研修は高い成果を上げつつ、次回に向けた質的向上の方向性も明確となりました。

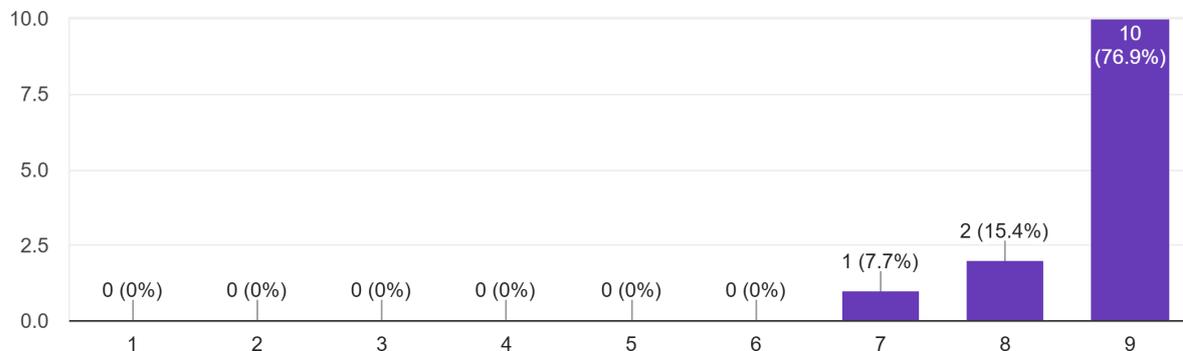
この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま...。 (1...眠かった、9...眠くならなかった)
13件の回答



指標	数値
平均値	8.15
中央値	9
最頻値	9
標準偏差	約 2.10
9の割合	76.9% (10名)
8以上の割合	84.6% (11名)
6以下の割合	15.4% (2名)

本設問（1＝眠った、9＝眠くならなかった）では、平均 8.15、中央値 9 と高い集中度が確認されました。回答者 13 名中 10 名（76.9%）が最高評価の 9 を選択し、8 以上は 11 名（84.6%）に達しています。一方で 1 および 6 の評価が各 1 名（計 15.4%）存在し、参加者間でわずかな体感差も見られました。全体として高い没入度を維持できた研修であったと評価できますが、今後は導入説明やレベル配慮の工夫により、さらなる均質化と満足度向上が期待されます。

この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...をそそられなかった、9...好奇心をそそられた)
13件の回答



指標 **数値**

平均値 **8.69**

中央値 **9**

最頻値 **9**

標準偏差 **約 0.75**

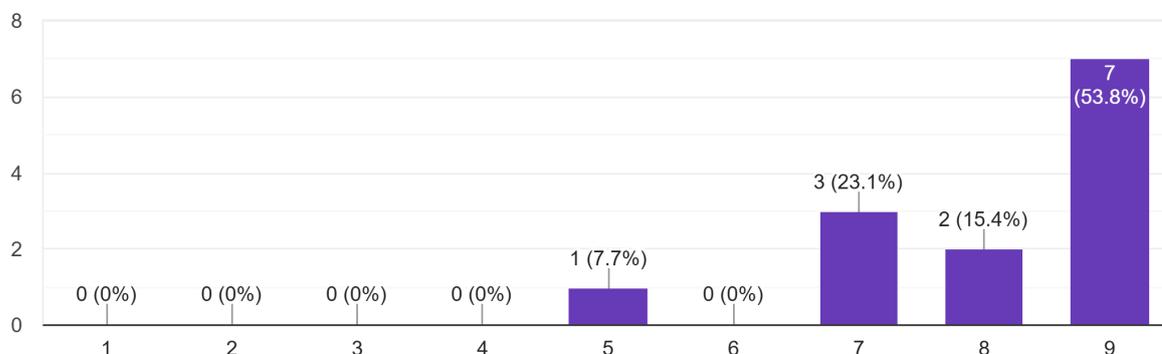
9の割合 **76.9% (10名)**

8以上の割合 **92.3% (12名)**

7以下の割合 **7.7% (1名)**

1～6の割合 **0%**

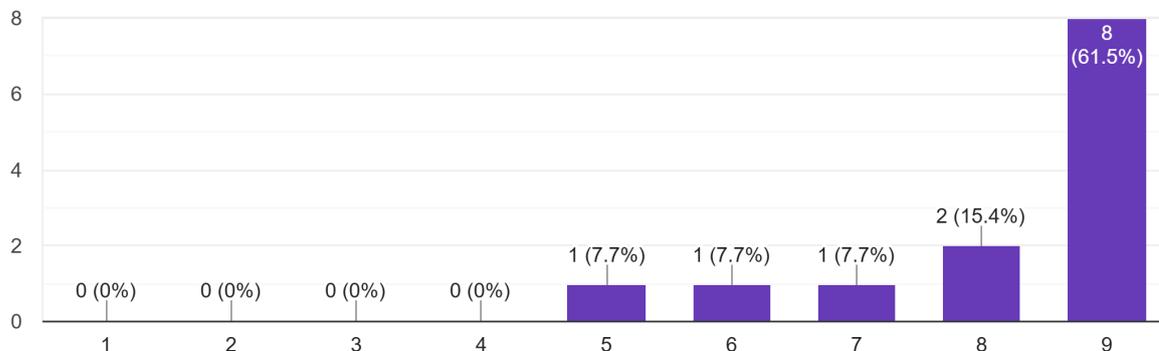
この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま...（1...マンネリだった、9...おもしろかった）
13件の回答



指標	数値
平均値	8.00
中央値	8
最頻値	9
標準偏差	約 1.21
9の割合	53.8% (7名)
8以上の割合	69.2% (9名)
7以下の割合	30.8% (4名)
1~4の割合	0%

本設問（1＝マンネリだった、9＝おもしろかった）では、平均 8.00、中央値 8 と高い評価を得ました。回答者 13 名中 9 名（69.2%）が 8 以上を選択し、うち 7 名（53.8%）が最高評価の 9 を付けています。1～4 の低評価はゼロであり、全体としてマンネリ感はほぼ見られませんでした。一方で 7 以下が 4 名（30.8%）存在しており、さらなる満足度向上に向けては参加型要素や具体事例の充実などにより、より強い「面白さ」の実感を高めていくことが今後の課題といえます。

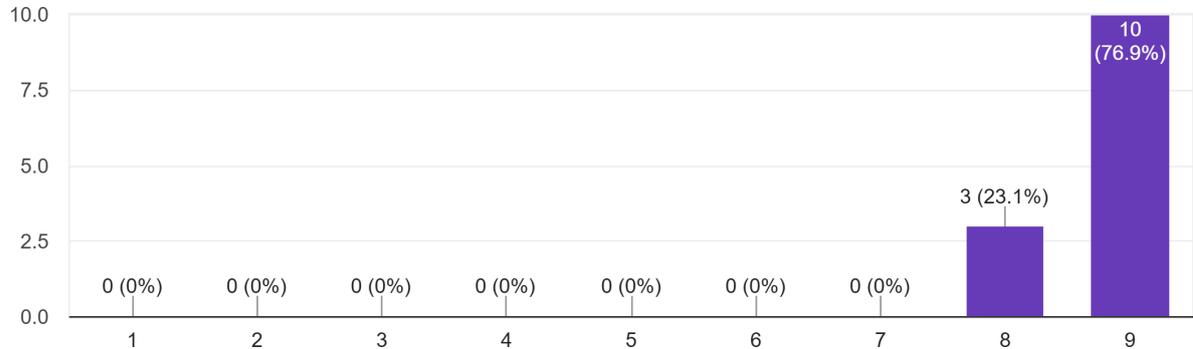
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのくらい近い印象を持ち.....やりがいがなかった、9...やりがいがあった)
 13件の回答



指標	数値
平均値	8.15
中央値	9
最頻値	9
標準偏差	約 1.35
9の割合	61.5% (8名)
8以上の割合	76.9% (10名)
7以下の割合	23.1% (3名)
1~4の割合	0%

設問（1＝やりがいがなかった、9＝やりがいがあった）では、平均 8.15、中央値 9 と高い評価を得ました。回答者 13 名中 10 名（76.9%）が 8 以上を選択し、うち 8 名（61.5%）が最高評価の 9 を付けています。1～4 の低評価はなく、全体として研修内容に実践的価値や手応えを感じていただけた結果といえます。一方で 5～6 の評価が計 2 名（15.4%）あり、今後は具体的な活用イメージやアクション設計をより明確に示すことで、さらなる向上が期待されます。

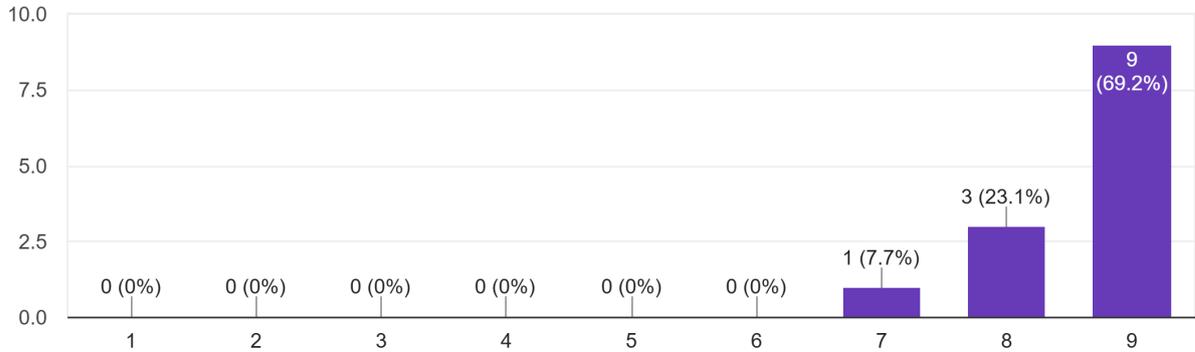
この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...分には無関係だった、9...自分に関係があった)
13件の回答



指標	数値
平均値	8.77
中央値	9
最頻値	9
標準偏差	約 0.42
9の割合	76.9% (10名)
8以上の割合	100% (13名)
7以下	0%

本設問（1＝自分には無関係だった、9＝自分に関係があった）では、平均 8.77、中央値 9 と極めて高い評価となりました。回答者 13 名全員（100%）が 8 以上を選択し、うち 10 名（76.9%）が最高評価の 9 を付けています。7 以下の回答はなく、評価のばらつきも小さい結果となりました。本研修は参加者にとって自分ごととして捉えられる内容であったことが明確に示されており、実践への接続可能性が高い成果といえます。

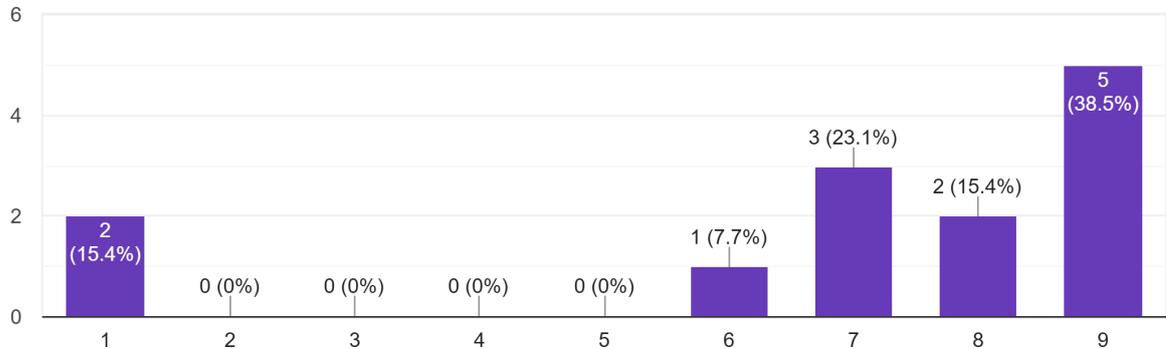
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...いい内容だった、9...身につけたい内容だった)
 13件の回答



指標	数値
平均値	8.62
中央値	9
最頻値	9
標準偏差	約 0.63
9の割合	69.2% (9名)
8以上の割合	92.3% (12名)
7以下の割合	7.7% (1名)
1~6の割合	0%

本設問（1=いい内容だった、9=身につけたい内容だった）では、平均 8.62、中央値 9 と高い評価を得ました。回答者 13 名中 12 名（92.3%）が 8 以上を選択し、うち 9 名（69.2%）が最高評価の 9 を付けています。7 以下は 1 名（7.7%）にとどまり、低評価は見られませんでした。本研修は単に「良い内容」と受け止められるにとどまらず、実際に習得・実践したいと感じられる内容であったことが示されており、今後の行動や導入検討につながる成果といえます。

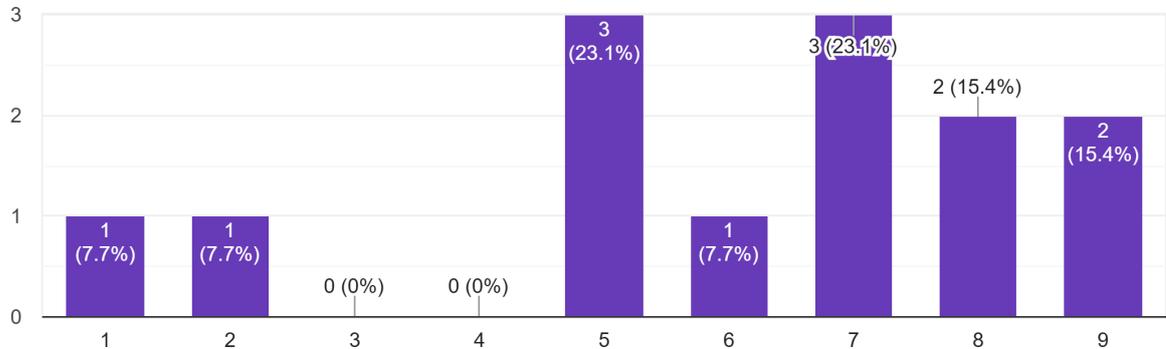
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...楽しくなかった、9...途中の過程が楽しかった)
 13件の回答



指標	数値
平均値	6.38
中央値	7
最頻値	9
標準偏差	約 2.44
9 の割合	38.5% (5名)
8 以上の割合	53.8% (7名)
6 以下の割合	38.5% (5名)
1 の割合	15.4% (2名)

本設問（1 = 楽しくなかった、9 = 途中の過程が楽しかった）では、平均 6.38、中央値 7 という結果となりました。9 を選択した参加者は 5 名（38.5%）、8 以上は 7 名（53.8%）でした。一方で 1 の評価が 2 名（15.4%）あり、6 以下も計 5 名（38.5%）と、他設問に比べて評価のばらつきが見られました。内容面の満足度や関係性評価が高い一方、体験過程の楽しさについては改善余地が示唆されており、参加型要素や進行設計の工夫が今後の課題といえます。

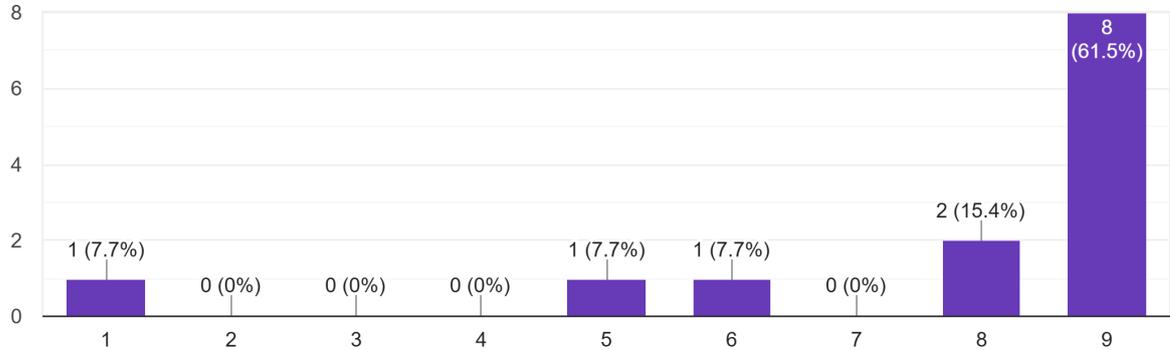
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...（1...自信がつかなかった、9...自信がついた）
 13件の回答



指標	数値
平均値	6.23
中央値	7
最頻値	5・7 (同数)
標準偏差	約 2.37
8以上の割合	30.8% (4名)
7以上の割合	53.8% (7名)
5以下の割合	38.5% (5名)
1・2の割合	15.4% (2名)

本設問（1＝自信がつかなかった、9＝自信がついた）では、平均 6.23、中央値 7 という結果となりました。7 以上の回答は 7 名（53.8%）である一方、5 以下も 5 名（38.5%）存在し、評価のばらつきが見られました。1・2 の低評価も計 2 名（15.4%）あり、他設問と比較すると自信形成の面では改善余地が示唆されます。関心や必要性の理解は高い水準にあるものの、成功体験や具体的実践イメージの提供を強化することで、さらなる自信醸成につなげていくことが今後の課題といえます。

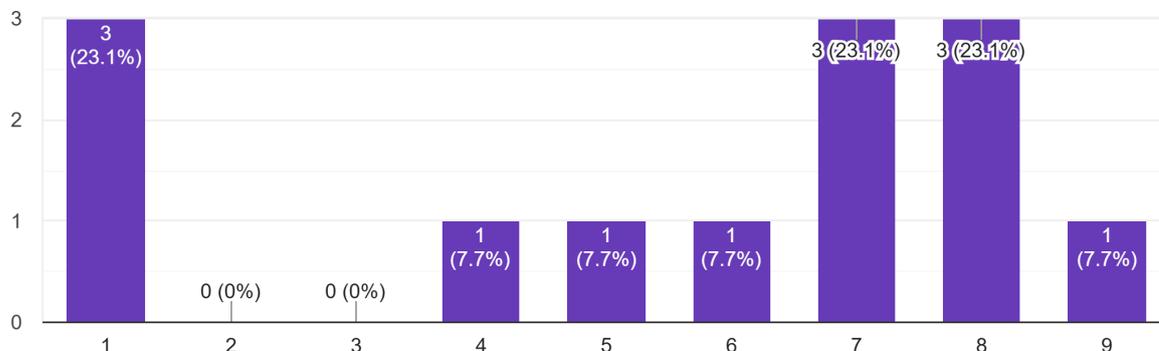
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...あいまいだった、9...目標がはっきりしていた)
 13件の回答



指標	数値
平均値	7.69
中央値	9
最頻値	9
標準偏差	約 2.30
9 の割合	61.5% (8名)
8 以上の割合	76.9% (10名)
6 以下の割合	23.1% (3名)
1 の割合	7.7% (1名)

本設問（1＝あいまいだった、9＝目標がはっきりしていた）では、平均 7.69、中央値 9 と概ね高い評価となりました。回答者 13 名中 10 名（76.9%）が 8 以上を選択し、うち 8 名（61.5%）が最高評価の 9 を付けています。一方で 6 以下が 3 名（23.1%）、1 の評価も 1 名（7.7%）見られ、参加者間で目標認識に差があったことが示唆されます。全体として方向性は共有できているものの、冒頭での到達目標の明確化や各セッションの目的提示を強化することが今後の改善点といえます。

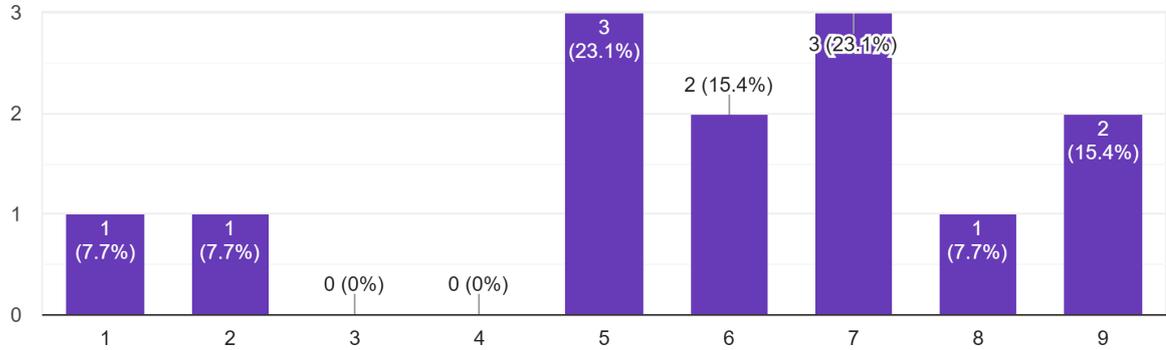
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...められなかった、9...学習を着実に進められた)
 13件の回答



指標	数値
平均値	5.23
中央値	7
最頻値	1・7・8 (同数)
標準偏差	約 2.73
8以上の割合	30.8% (4名)
7以上の割合	53.8% (7名)
5以下の割合	46.2% (6名)
1の割合	23.1% (3名)

本設問（1＝学習を進められなかった、9＝学習を着実に進められた）では、平均 5.23 と他項目に比べ低い結果となりました。7 以上は 7 名（53.8%）であった一方、5 以下も 6 名（46.2%）、うち 1 の評価が 3 名（23.1%）見られ、評価のばらつきが大きい傾向が確認されました。内容への関心や必要性理解は高水準であるものの、学習進展の実感には差が生じています。今後は到達目標の明確化や成果物作成時間の確保などにより、学びの定着感を高める工夫が求められます。

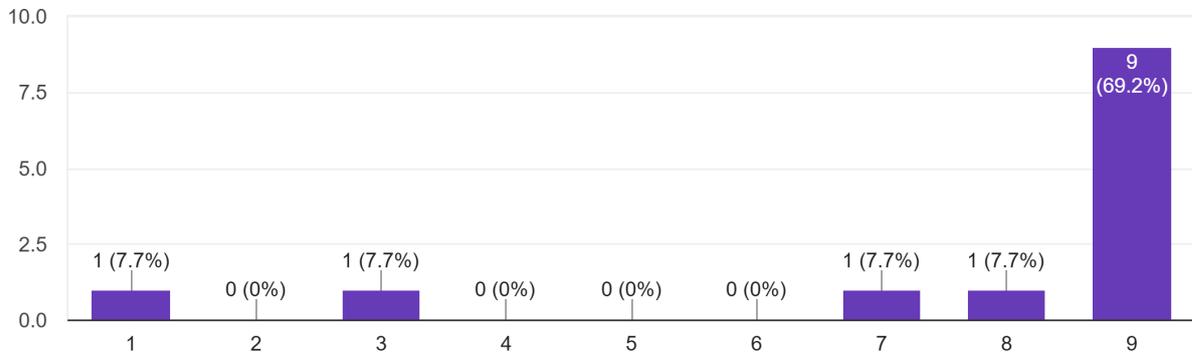
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...ができなかった、9...自分なりの工夫ができた)
 13件の回答



指標	数値
平均値	6.00
中央値	6
最頻値	5・7 (各3名)
標準偏差	約 2.26
8以上の割合	23.1% (3名)
7以上の割合	38.5% (5名)
5以下の割合	46.2% (6名)
1・2の割合	15.4% (2名)

本設問（1＝工夫できなかった、9＝自分なりの工夫ができた）では、平均 6.00、中央値 6 という結果となりました。7 以上は 5 名（38.5%）である一方、5 以下も 6 名（46.2%）を占め、評価のばらつきが見られました。特に 1・2 の低評価が 2 名（15.4%）存在し、応用・実践段階への到達には差があることが示唆されます。内容理解や関心は高いものの、自分なりの工夫や活用まで結び付けるためには、演習時間やフィードバックの充実など、実践設計の強化が今後の課題といえます。

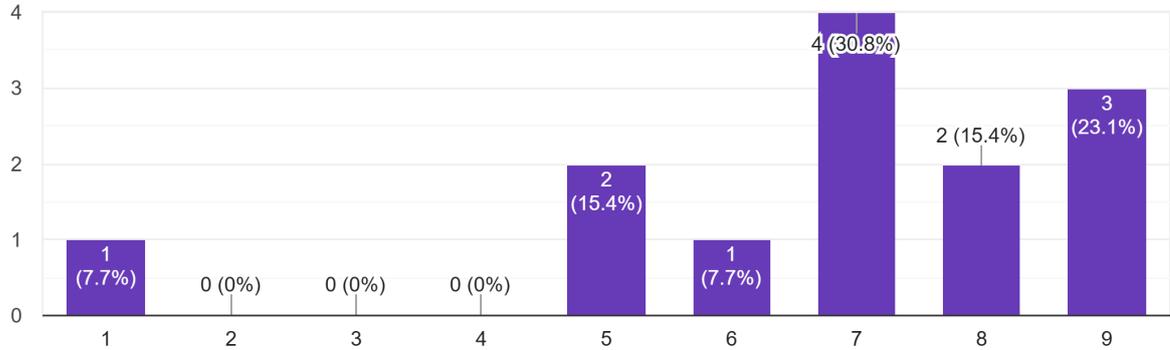
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま…。 (1…不満が残った、9…やってよかった)
 13件の回答



指標	数値
平均値	7.62
中央値	9
最頻値	9
標準偏差	約 2.59
9の割合	69.2% (9名)
8以上の割合	76.9% (10名)
7以下の割合	23.1% (3名)
1・3の割合	15.4% (2名)

本設問（1＝不満が残った、9＝やってよかった）では、平均 7.62、中央値 9 と総合的に高い評価となりました。回答者 13 名中 10 名（76.9%）が 8 以上を選択し、うち 9 名（69.2%）が最高評価の 9 を付けています。一方で 1 および 3 の低評価が各 1 名（計 15.4%）見られ、参加者間で体験の差があったことも示唆されます。全体として満足度は高水準にありますが、学習実感や自信醸成を強化することで、さらなる安定的向上が期待されます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...ぐには使えそうもない、9...すぐに使えそうだ)
 13件の回答



指標	数値
平均値	6.69
中央値	7
最頻値	7
標準偏差	約 2.23

8以上の割合 **38.5% (5名)**

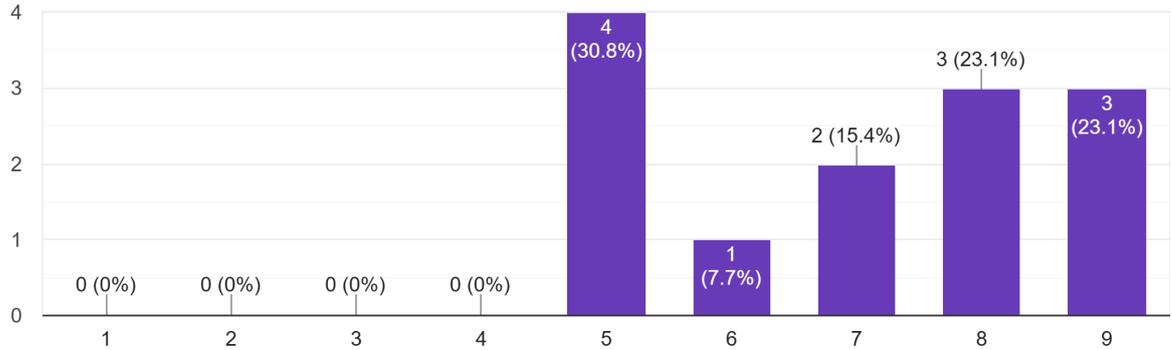
7以上の割合 **69.2% (9名)**

5以下の割合 **23.1% (3名)**

1の割合 **7.7% (1名)**

本設問（1＝すぐには使えそうもない、9＝すぐに使えそうだ）では、平均 6.69、中央値 7 という結果となりました。7 以上は 9 名（69.2%）であり、一定の即実装性は感じられているものの、8 以上は 5 名（38.5%）にとどまりました。一方で 5 以下も 3 名（23.1%）、1 の評価が 1 名（7.7%）見られ、活用イメージには差があることが示唆されます。内容理解や関心は高水準にあるため、具体的な活用事例やテンプレート提示など、実装支援の強化が今後の課題といえます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...もらえなかった、9...できたら認めてもらえた)
 13件の回答



指標	数値
平均値	6.92
中央値	7
最頻値	5
標準偏差	約 1.50

8以上の割合 **46.2% (6名)**

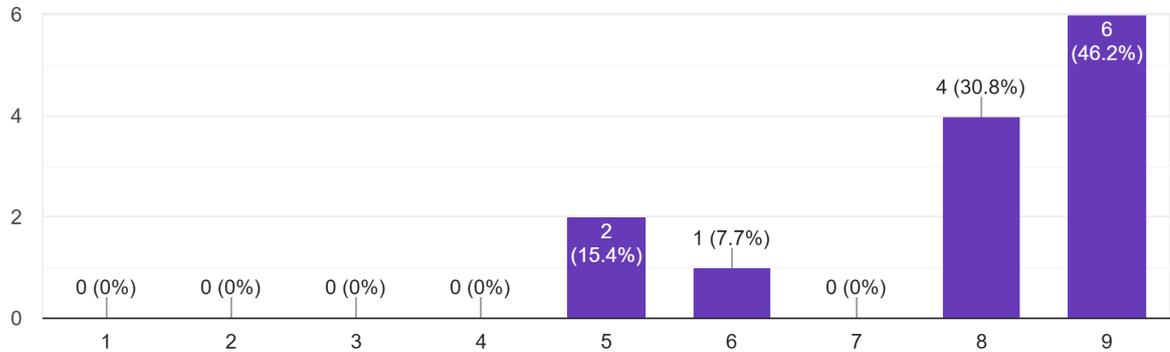
7以上の割合 **61.5% (8名)**

5以下の割合 **30.8% (4名)**

1~4の割合 **0%**

本設問（1＝認めてもらえなかった、9＝できたら認めてもらえた）では、平均 6.92、中央値 7 という結果となりました。7以上は8名（61.5%）、8以上は6名（46.2%）であり、一定の承認実感は得られているものの、5の評価も4名（30.8%）見られました。1～4の低評価はなく、否定的な受け止めは少ない一方で、強い達成感や評価実感には差があることが示唆されます。今後は成果物共有やフィードバック機会の充実により、承認実感をさらに高めていくことが課題といえます。

この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...一貫性が無かった、9...評価に一貫性があった)
13件の回答



指標 **数値**

平均値 **7.69**

中央値 **8**

最頻値 **9**

標準偏差 **約 1.46**

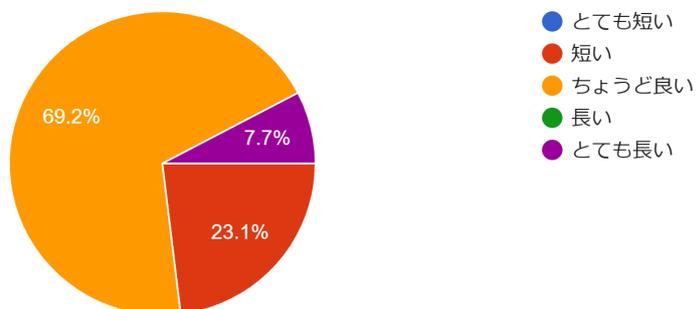
8以上の割合 **76.9% (10名)**

7以下の割合 **23.1% (3名)**

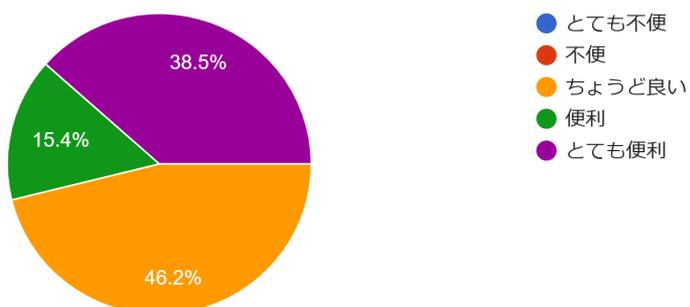
1～4の割合 **0%**

本設問（1＝評価に一貫性が無かった、9＝評価に一貫性があった）では、平均 7.69、中央値 8 と概ね高い評価となりました。回答者 13 名中 10 名（76.9%）が 8 以上を選択し、うち 6 名（46.2%）が最高評価の 9 を付けています。1～4 の低評価はなく、評価の公平性や基準の安定性は一定程度担保されているといえます。一方で 5 の評価が 2 名（15.4%）見られ、評価基準の共有やフィードバックの具体性をさらに高めることで、納得感の向上が期待されます。

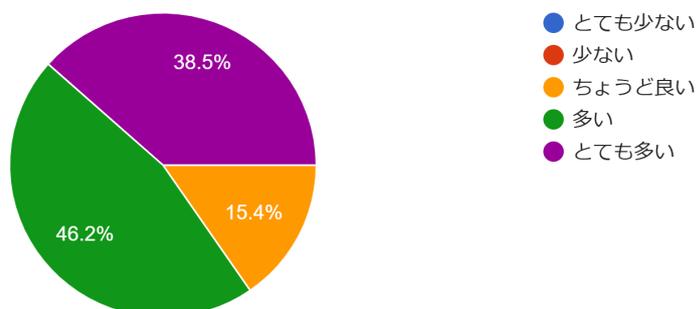
2a 今日の研修の長さ(3時間)はいかがでしたか。
13件の回答



2b 今日の開催場所（デジタルハリウッド大学）はいかがでしたか。
13件の回答

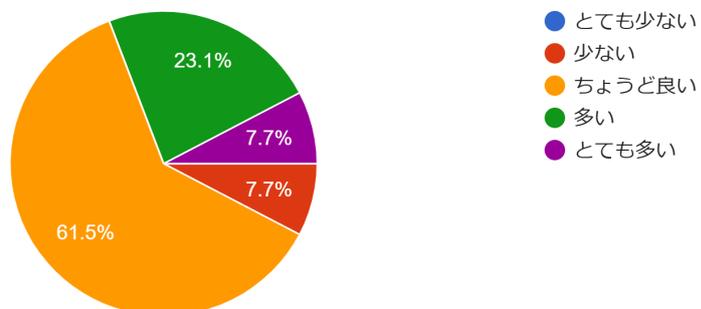


2c 今日の研修の事前学習の量はいかがでしたか。
13件の回答



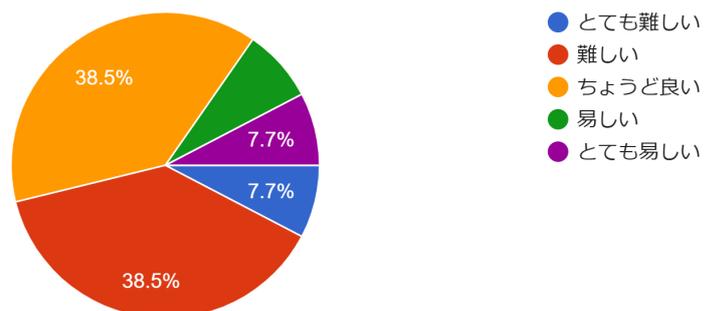
2d 今日の研修で扱った学習内容の量はいかがでしたか。

13件の回答



2e 今日の研修で扱った学習内容の難易度はいかがでしたか。

13件の回答



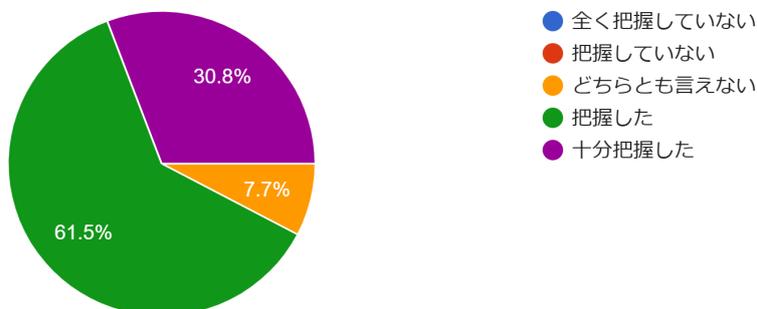
2f 今日の研修で学んだ内容を自校の授業改善支援に活用したいですか。

13件の回答



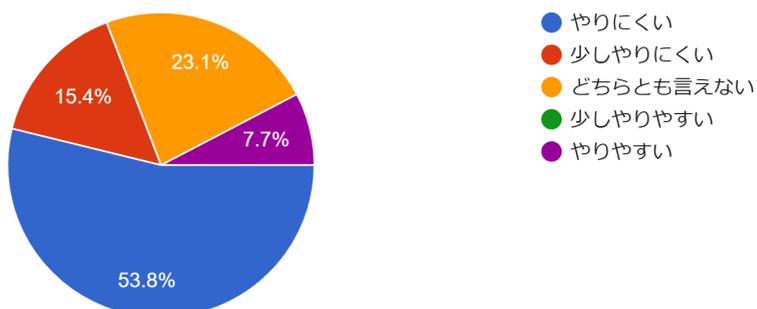
2g 次回の研修までにやることを把握できましたか。

13件の回答



2h facebookグループを使ってコミュニケーションをとることについてどう思いますか。

13件の回答



本研修（回答 13 名）について総合的に分析した結果、内容価値および実践意欲の面で極めて高い成果が確認されました。活用意向は 100%（「とても活用したい」61.5%、「活用したい」38.5%）、次回までの行動把握も 92.3% が肯定的回答であり、実装可能性の高い研修であったと評価できます。研修時間は 69.2%が「ちょうど良い」と回答し、会場満足度も肯定的評価が 100%でした。一方で、事前学習量については 84.7%が「多い」と回答し、難易度も 46.2%が「難しい」と感じており、負荷設計には改善余地が見られます。また、Facebook によるコミュニケーションは約 69%が「やりにくい」と回答しており、運用基盤の再検討が必要です。総じて、本研修は高い価値と実装意欲を生み出している一方、負荷調整とコミュニケーション設計の最適化が今後の発展課題といえます。

• **研修 1 日目について受講者の声（定性コメント）**：本研修（回答 13 名）のアンケート結果を総合的に分析したところ、内容価値および実践意欲の面で高い成果が確認されました。「活用したい」「とても活用したい」と回答した割合は 100%に達し、次回までの行動把握についても 92.3%が肯定的に回答しており、実装可能性の高い研修であったと評価できます。また、会場環境に対する満足度は 100%が肯定的評価であり、研修時間も約 7 割が「ちょうど良い」と回答するなど、運営面は概ね適正でした。

自由記述では、他校教員との意見交換やネットワーク形成に対する評価が最も多く、専門学校間で組織的に授業改善に取り組む可能性への期待が示されました。また、授業改善の具体的手法や評価の在り方を学べたこと、自校の課

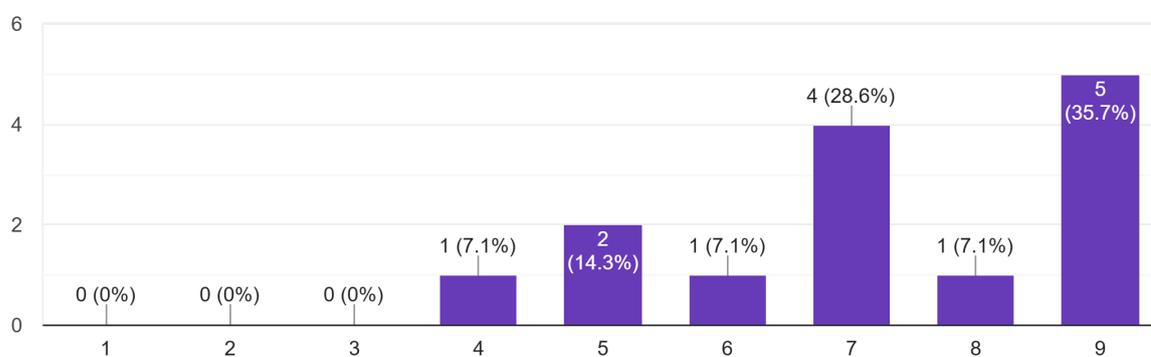
題が明確になったことなど、知識面・気づきの面での成果も多く報告されています。

一方で、事前学習量は約 85%が「多い」と回答し、難易度も約 46%が「難しい」と感じており、負荷設計には改善余地が見られます。また、学習進展実感や自信醸成の面では評価のばらつきが確認されました。今後は、到達目標のさらなる明確化、成果物作成やフィードバック機会の充実により、学びの定着と実践転換を一層促進していく必要があります。

研修 2

日目（令和 7 年 11 月 4 日火曜日 14:00-17:00 オンライン参集型）のアンケート結果・分析

この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま...（1...つまらなかった、9...おもしろかった）
14 件の回答



指標 数値

平均値 7.00

中央値 7

最頻値 9

標準偏差 約 1.62

8 以上 42.9% (6 名)

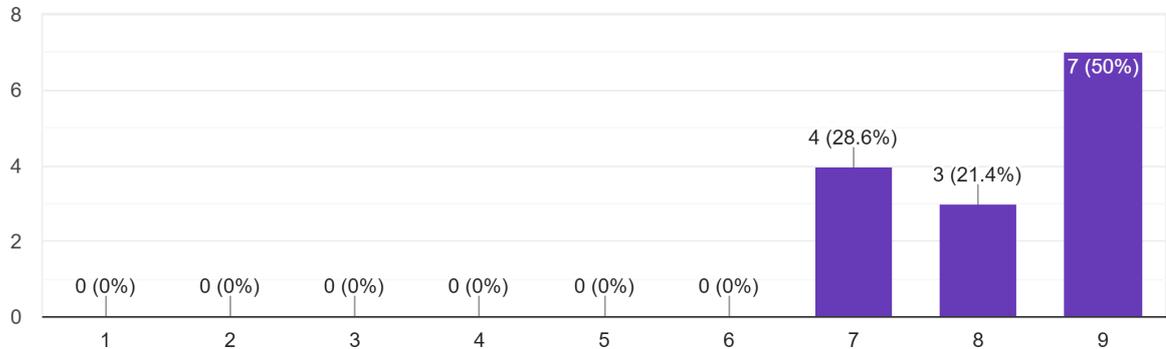
7 以上 71.4% (10 名)

6 以下 28.6% (4 名)

1~3 0%

本設問（1＝つまらなかった、9＝おもしろかった）では、平均 7.00、中央値 7 という結果となりました。回答者 14 名中 10 名（71.4%）が 7 以上を選択し、うち 6 名（42.9%）が 8 以上と評価しています。1～3 の低評価はなく、一定の満足度は確保できているといえます。一方で 6 以下が 4 名（28.6%）存在しており、強い没入感や印象に残る体験には至らなかった層も見られます。今後は参加型要素や具体的事例の充実により、「強くおもしろい」と感じる層の拡大を図ることが課題といえます。

この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま...。 (1...眠かった、9...眠くならなかった)
14件の回答



指標 数値

平均値 **8.21**

中央値 **9**

最頻値 **9**

標準偏差 約 **0.80**

9の割合 **50.0% (7名)**

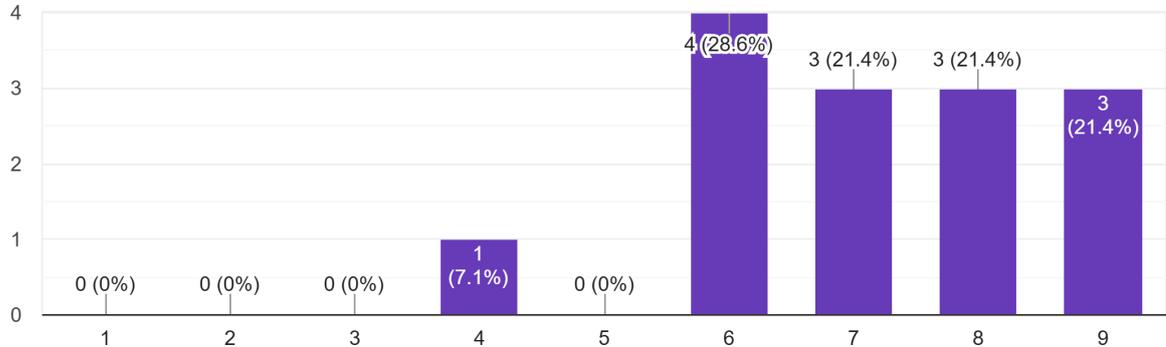
8以上 **71.4% (10名)**

7以上 **100% (14名)**

6以下 **0%**

本設問（1＝眠った、9＝眠くならなかった）では、平均 8.21、中央値 9 と非常に高い評価となりました。回答者 14 名全員（100%）が 7 以上を選択し、うち 7 名（50.0%）が最高評価の 9 を付けています。6 以下の回答はなく、集中度の高さと安定した運営設計が確認されました。標準偏差も小さく、参加者間の体験格差はほぼ見られません。研修の進行や構成は適切であり、学習環境として高い質を確保できていると評価できます。

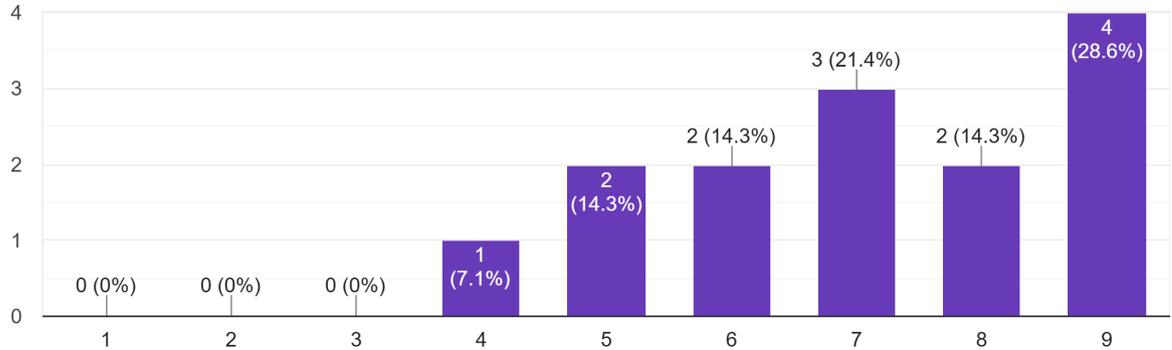
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...をそそられなかった、9...好奇心をそそられた)
 14件の回答



指標	数値
平均値	7.00
中央値	7
最頻値	6
標準偏差	約 1.41
8 以上	42.9% (6名)
7 以上	64.3% (9名)
6 以下	35.7% (5名)
1~3	0%

本設問（1 = 好奇心をそそられなかった、9 = 好奇心をそそられた）では、平均 7.00、中央値 7 という結果となりました。回答者 14 名中 9 名（64.3%）が 7 以上を選択し、うち 6 名（42.9%）が 8 以上と評価しています。1~3 の低評価はなく、一定の関心喚起は達成できているといえます。一方で 6 以下も 5 名（35.7%）存在しており、強い知的刺激に至らなかった層も見られます。今後は具体事例の提示や参加型要素の強化により、より高い好奇心喚起を必要と思われれます。

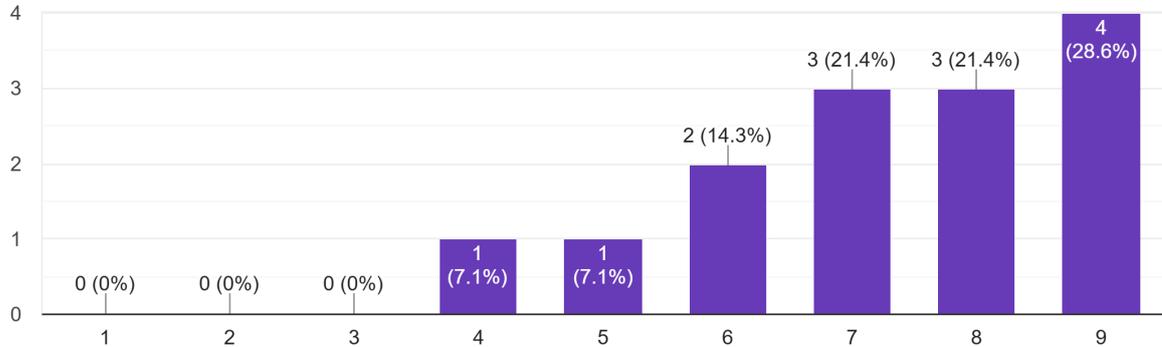
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま...（1...マンネリだった、9...おもしろかった）
 14件の回答



指標	数値
平均値	6.86
中央値	7
最頻値	9
標準偏差	約 1.57
8以上	42.9% (6名)
7以上	64.3% (9名)
6以下	35.7% (5名)
1~3	0%

本設問（1＝マンネリだった、9＝おもしろかった）では、平均 6.86、中央値 7 という結果となりました。回答者 14 名中 9 名（64.3%）が 7 以上を選択し、うち 6 名（42.9%）が 8 以上と評価しています。1～3 の低評価はなく、一定の満足度は確保されています。一方で 6 以下が 5 名（35.7%）存在し、「強くおもしろい」と感じる層は限定的でした。今後は参加型ワークや具体事例の充実など体験設計を強化し、より印象に残る研修への向上を図ることが課題といえます。

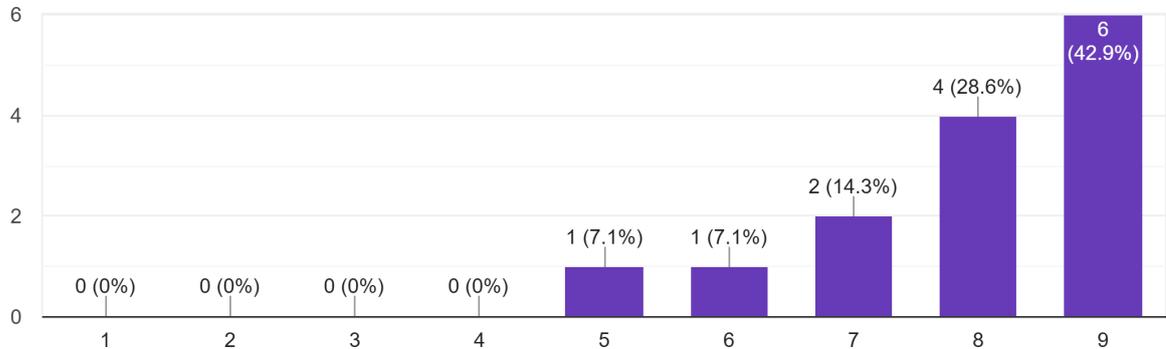
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち.....やりがいなかった、9...やりがいがあった)
 14件の回答



指標 数値
 平均値 **7.14**
 中央値 **7.5 (7と8の間)**
 最頻値 **9**
 標準偏差 約 **1.57**
 8以上 **50.0% (7名)**
 7以上 **71.4% (10名)**
 6以下 **28.6% (4名)**
 1~3 **0%**

本設問（1＝やりがいなかった、9＝やりがいがあった）では、平均 7.14、中央値 7.5 と概ね高い評価となりました。回答者 14 名中 10 名（71.4%）が 7 以上を選択し、うち 7 名（50.0%）が 8 以上と回答しています。1～3 の低評価はなく、一定の達成感や意義を感じていただけた結果といえます。一方で 6 以下も 4 名（28.6%）存在しており、強い手応えに至らなかった層も見られます。今後は成果物作成や具体的アクション設計を強化し、より高い達成感の醸成を図る必要があると思われます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...分には無関係だった、9...自分に関係があった)
 14件の回答



指標 数値

平均値 **8.00**

中央値 **8**

最頻値 **9**

標準偏差 約 **1.25**

8 以上 **71.4% (10 名)**

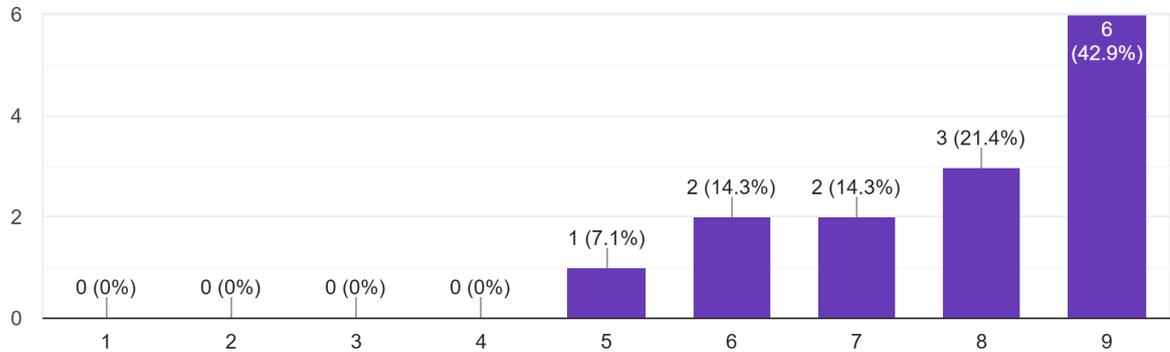
7 以上 **85.7% (12 名)**

6 以下 **14.3% (2 名)**

1~4 **0%**

本設問（1 = 自分には無関係だった、9 = 自分に関係があった）では、平均 8.00、中央値 8 と高い評価となりました。回答者 14 名中 12 名（85.7%）が 7 以上を選択し、うち 10 名（71.4%）が 8 以上と回答しています。1~4 の低評価はなく、研修内容を自分事として捉えていただけた結果といえます。一方で 6 以下が 2 名（14.3%）見られ、関係性の感じ方には一定の差も確認されました。今後は事例の多様化や役割別視点の提示により、さらに当事者意識の向上が必要と言えます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...いい内容だった、9...身につけたい内容だった)
 14件の回答



指標 数値

平均値 **7.79**

中央値 **8**

最頻値 **9**

標準偏差 約 **1.30**

8 以上 **64.3% (9名)**

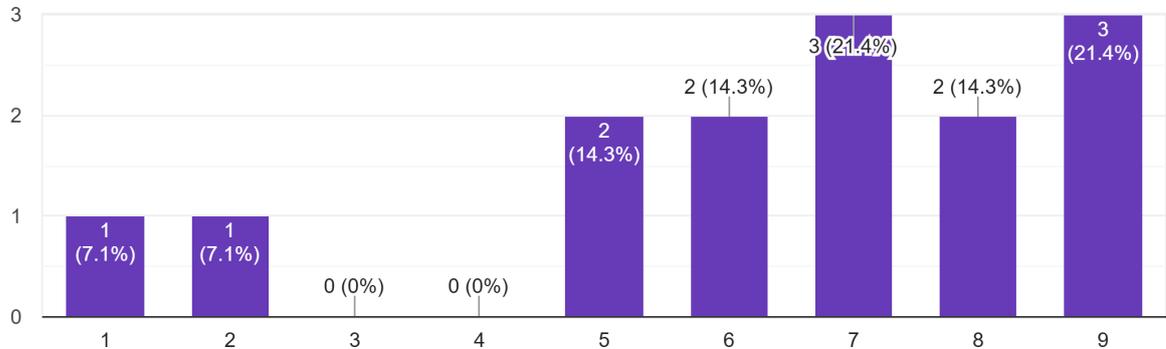
7 以上 **78.6% (11名)**

6 以下 **21.4% (3名)**

1~4 **0%**

本設問（1=いい内容だった、9=身につけたい内容だった）では、平均 7.79、中央値 8 と高い評価を得ました。回答者 14 名中 11 名（78.6%）が 7 以上を選択し、うち 9 名（64.3%）が 8 以上、6 名（42.9%）が最高評価の 9 を付けています。1~4 の低評価はなく、内容への肯定的評価は安定しています。一方で 6 以下も 3 名（21.4%）見られ、習得意欲の強度には差があることが示唆されます。今後は具体的な活用方法やテンプレートの提示を強化し、実践への転換をさらに促進していくことが求められます。

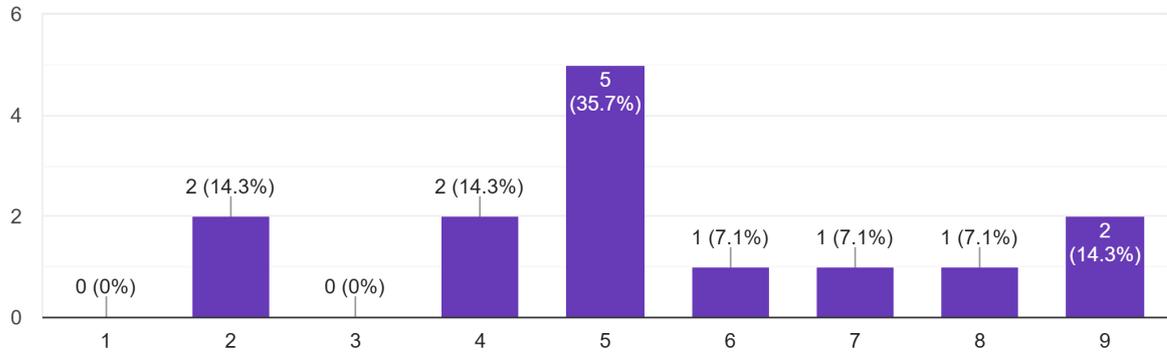
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...楽しくなかった、9...途中の過程が楽しかった)
 14件の回答



指標	数値
平均値	6.29
中央値	7
最頻値	7・9 (同数)
標準偏差	約 2.36
8 以上	35.7% (5名)
7 以上	57.1% (8名)
6 以下	42.9% (6名)
1・2	14.3% (2名)

本設問（1 = 楽しくなかった、9 = 途中の過程が楽しかった）では、平均 6.29、中央値 7 という結果となりました。回答者 14 名中 8 名（57.1%）が 7 以上を選択した一方、6 以下も 6 名（42.9%）存在し、体験の感じ方に差が見られました。特に 1・2 の低評価が 2 名（14.3%）あり、過程の楽しさという点では改善余地が示唆されます。内容理解や関係性評価は高水準であることから、今後は参加型ワークや双方向性の強化など、体験設計の工夫により満足度向上を図っていくことが求められます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...（1...自信がなかった、9...自信がついた）
 14件の回答



指標 数値

平均値 **5.21**

中央値 **5**

最頻値 **5 (35.7%)**

標準偏差 **約 2.05**

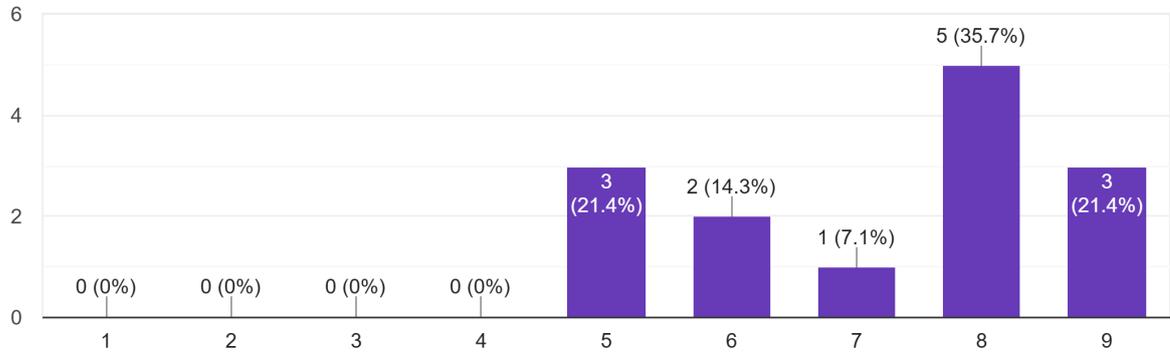
7以上 **28.6% (4名)**

6以下 **71.4% (10名)**

4以下 **28.6% (4名)**

本設問（1＝自信がなかった、9＝自信がついた）では、平均5.21、中央値5という結果となりました。回答者14名中7以上は4名（28.6%）にとどまり、6以下が10名（71.4%）を占めています。特に5の評価が5名（35.7%）と最多であり、自信形成は中立的な水準に留まっていることが示唆されます。他項目では関心や習得意欲が高水準である一方、実践への自信には十分転換されていない状況が見られます。今後は小さな成功体験の設計や具体的な演習機会の充実により、自信醸成を強化していくことが求められます。

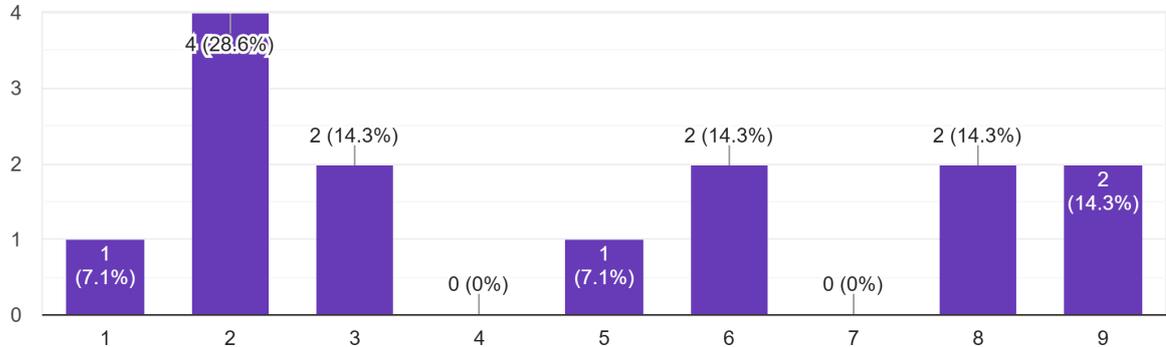
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...あいまいだった、9...目標がはっきりしていた)
 14件の回答



指標	数値
平均値	7.14
中央値	8
最頻値	8 (35.7%)
標準偏差	約 1.30
8 以上	57.1% (8名)
7 以上	64.3% (9名)
6 以下	35.7% (5名)
1~4	0%

本設問（1＝あいまいだった、9＝目標がはっきりしていた）では、平均7.14、中央値8という結果となりました。回答者14名中8名（57.1%）が8以上を選択し、一定の目標明確性は確保されています。一方で6以下も5名（35.7%）存在し、目標の受け止め方には差が見られました。1～4の低評価はなく、方向性自体は共有できていると考えられます。今後は冒頭での到達目標の明示や途中での振り返り機会を強化することで、より一層の明確化と納得感の向上が必要です。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...められなかった、9...学習を着実に進められた)
 14件の回答



指標 数値

平均値 **4.71**

中央値 **4.0~5.0 付近 (実質 4~5)**

最頻値 **2 (28.6%)**

標準偏差 **約 2.73**

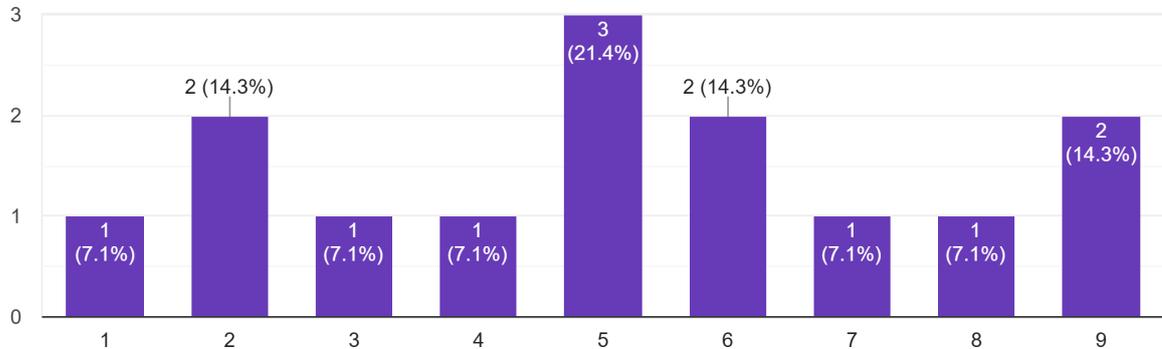
7以上 **28.6% (4名)**

5以下 **57.1% (8名)**

3以下 **50.0% (7名)**

本設問（1 = 学習を進められなかった、9 = 学習を着実に進められた）では、平均 4.71 と全体項目の中で最も低い結果となりました。回答者 14 名中 3 以下が 7 名（50.0%）を占め、特に「2」が 4 名（28.6%）と最多でした。一方で 8・9 の高評価も計 4 名（28.6%）存在し、学習進展の実感には大きな差が見られます。内容への関心や必要性理解は高水準であるものの、定着や習熟の実感には課題が示唆されました。今後は演習時間の確保や段階的設計の強化により、学びの定着感向上が必要とされます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...ができなかった、9...自分なりの工夫ができた)
 14件の回答



指標 数値

平均値 **4.93**

中央値 **5**

最頻値 **5 (21.4%)**

標準偏差 **約 2.45**

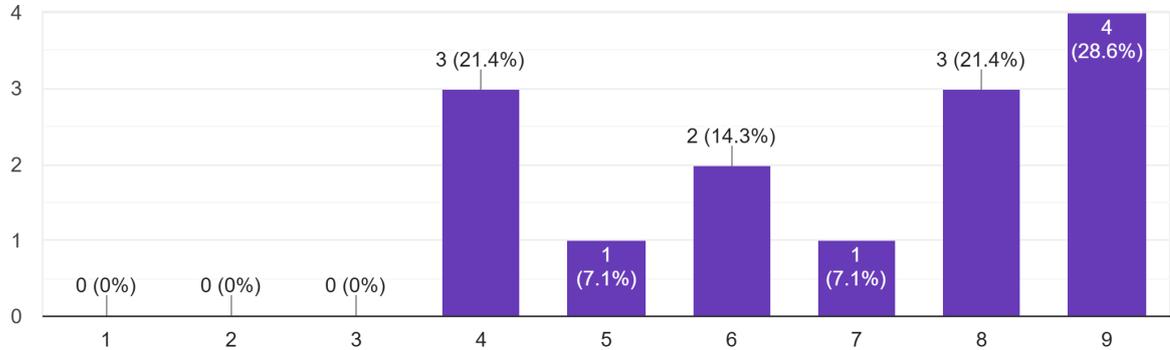
7以上 **28.6% (4名)**

6以下 **71.4% (10名)**

4以下 **35.7% (5名)**

本設問（1＝工夫できなかった、9＝自分なりの工夫ができた）では、平均4.93、中央値5という結果となりました。回答者14名中6以下が10名（71.4%）を占め、特に4以下も5名（35.7%）見られました。一方で8・9の高評価は計3名（21.4%）にとどまり、応用や工夫の実感には大きな差が確認されました。内容理解や関心は高水準であるものの、「できた」という実践段階への転換が十分とはいえません。今後は演習機会や具体的アウトプット設計を強化し、応用力の定着が必要です。

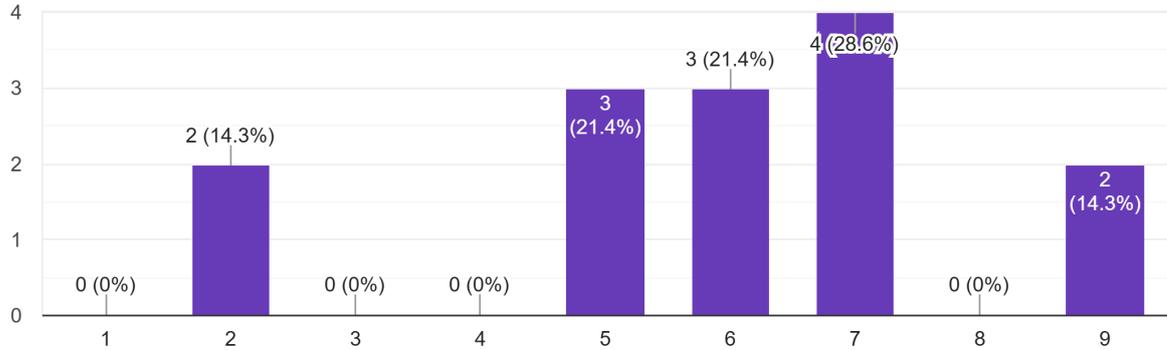
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま…。 (1…不満が残った、9…やってよかった)
 14件の回答



指標	数値
平均値	6.79
中央値	7
最頻値	9 (28.6%)
標準偏差	約 1.83
8以上	50.0% (7名)
7以上	57.1% (8名)
6以下	42.9% (6名)
1~3	0%

本設問（1＝不満が残った、9＝やってよかった）では、平均6.79、中央値7という結果となりました。回答者14名中8名（57.1%）が7以上を選択し、うち7名（50.0%）が8以上と評価しています。1～3の低評価はなく、一定の満足度は確保されています。一方で6以下も6名（42.9%）存在し、「やってよかった」と強く実感する層と中間層が併存する結果となりました。今後は成果実感や達成感を高める設計を強化し、満足度のさらなる向上を図る必要があります。

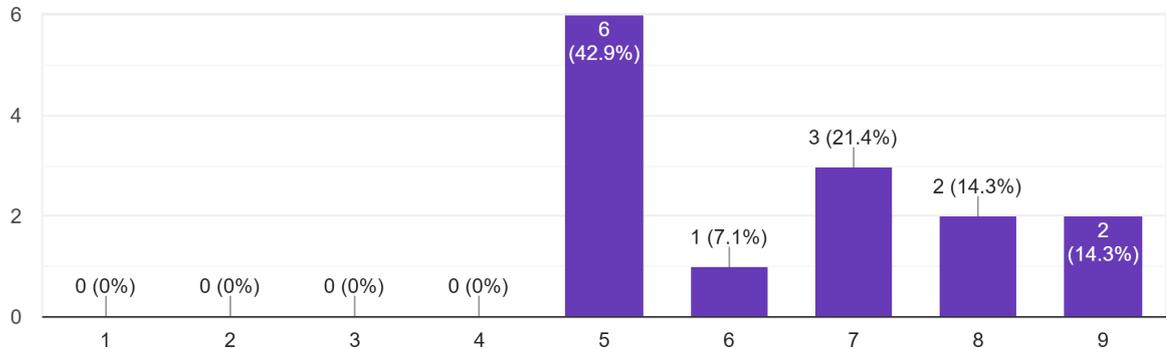
この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...ぐには使えそうもない、9...すぐに使えそうだ)
14件の回答



指標	数値
平均値	6.07
中央値	6
最頻値	7 (28.6%)
標準偏差	約 1.88
7以上	42.9% (6名)
6以下	57.1% (8名)
5以下	35.7% (5名)

本設問（1＝すぐには使えそうもない、9＝すぐに使えそうだ）では、平均 6.07、中央値 6 という結果となりました。回答者 14 名中 7 以上は 6 名（42.9%）にとどまり、6 以下が 8 名（57.1%）を占めています。特に 5 以下も 5 名（35.7%）見られ、即実装への確信には差があることが示されました。内容への関心や習得意欲は高い一方、「すぐに活用できる」という実感には十分転換されていない状況です。今後は具体的な活用事例やテンプレート提示を強化し、実践への橋渡しが必要です。

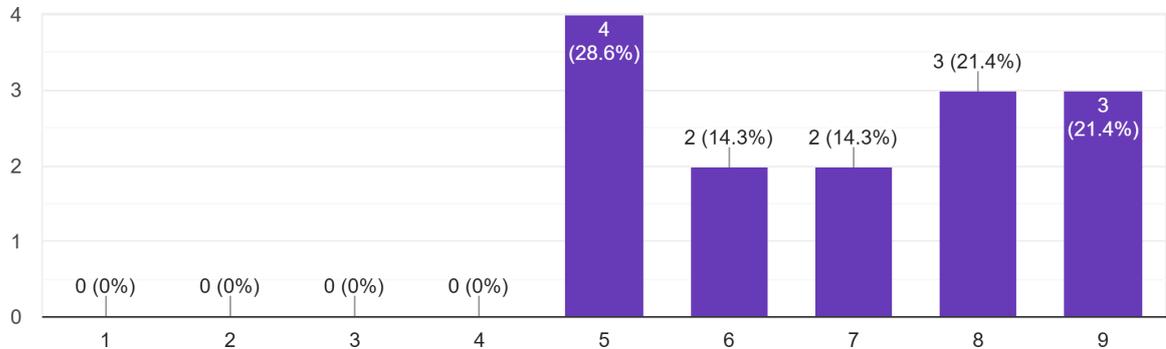
この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...もらえなかった、9...できたら認めてもらえた)
14件の回答



指標	数値
平均値	6.36
中央値	6.5 付近
最頻値	5 (42.9%)
標準偏差	約 1.46
7 以上	50.0% (7 名)
6 以下	50.0% (7 名)
4 以下	0%

本設問（1＝認めてもらえなかった、9＝できたら認めてもらえた）では、平均 6.36、中央値 6.5 付近という結果となりました。回答者 14 名中 7 以上は 7 名（50.0%）である一方、5 の評価が 6 名（42.9%）と最多であり、承認実感は中間水準にとどまっています。1～4 の低評価はなく大きな不満は見られませんが、強い承認体験には至っていない層も半数存在します。今後は成果共有や具体的フィードバックの充実により、承認実感の向上と自信醸成につなげる必要があります。

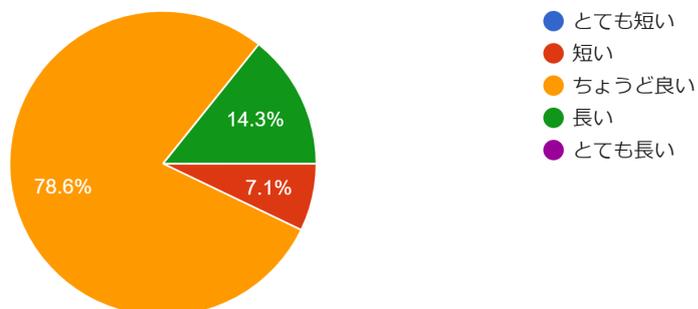
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...一貫性が無かった、9...評価に一貫性があった)
 14件の回答



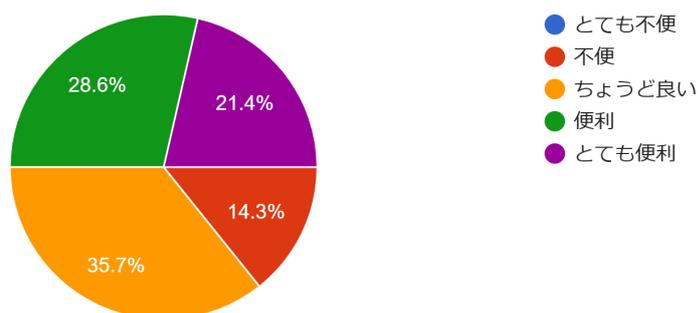
指標	数値
平均値	6.93
中央値	7
最頻値	5 (28.6%)
標準偏差	約 1.41
8以上	42.9% (6名)
7以上	57.1% (8名)
6以下	42.9% (6名)
1~4	0%

本設問（1＝評価に一貫性が無かった、9＝評価に一貫性があった）では、平均6.93、中央値7という結果となりました。回答者14名中8名（57.1%）が7以上を選択し、一定の安定性は確保されています。一方で5の評価が4名（28.6%）と最多であり、強い納得感にまでは至っていない層も見られます。1～4の低評価はなく、大きな不満は確認されませんでした。今後は評価基準の事前共有や具体的フィードバックの充実により、評価への信頼感と納得度のさらなる向上が必要です。

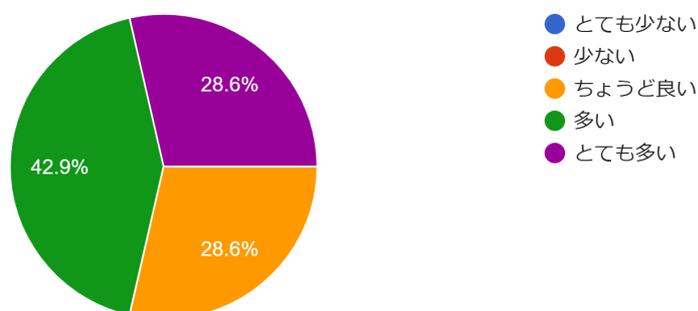
2a 今日の研修の長さ(3時間)はいかがでしたか。
14件の回答



2b 今日の開催場所（オンライン ZOOM）はいかがでしたか。
14件の回答

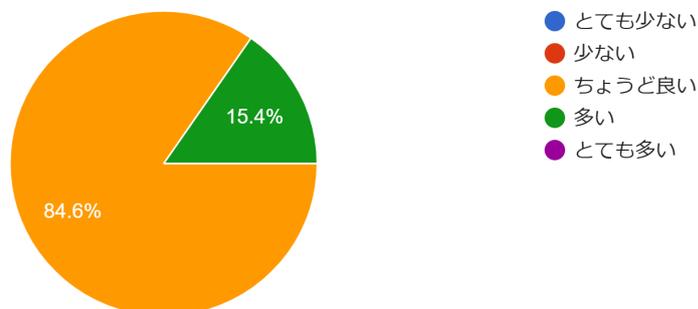


2c 今日の研修の事前学習の量はいかがでしたか。
14件の回答



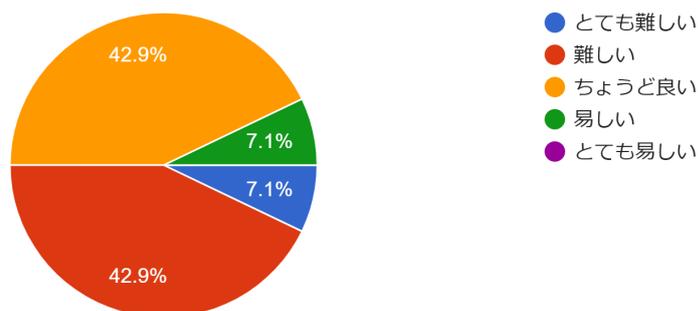
2d 今日の研修で扱った学習内容の量はいかがでしたか。

13件の回答



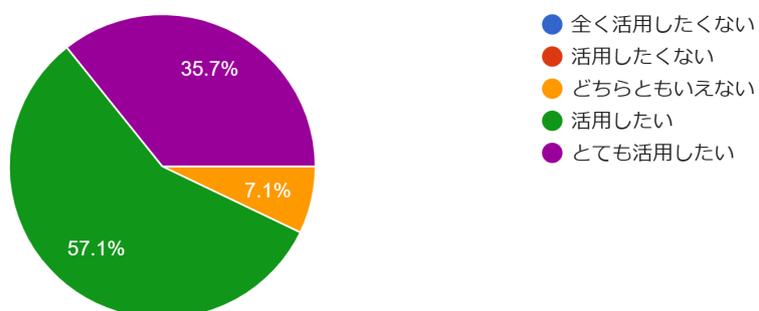
2e 今日の研修で扱った学習内容の難易度はいかがでしたか。

14件の回答



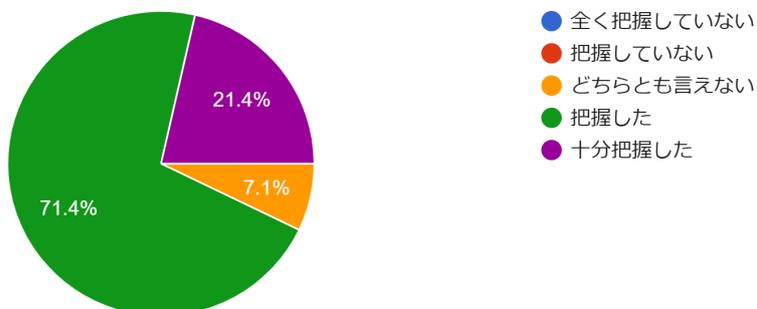
2f 今日の研修で学んだ内容を自校の授業改善支援に活用したいですか。

14件の回答



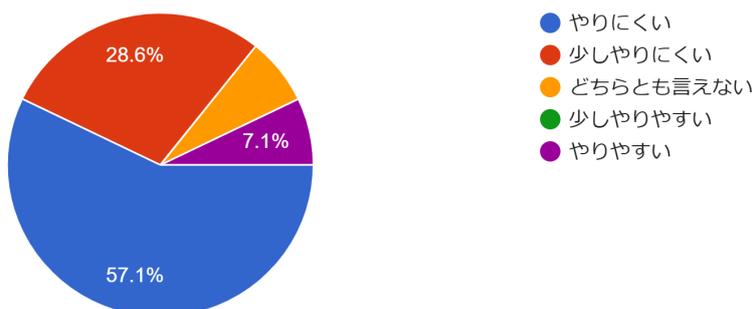
2g 次回の研修までにやることを把握できましたか。

14件の回答



2h facebookグループを使ってコミュニケーションをとることについてどう思いますか。

14件の回答



本研修（回答 14 名）の結果を総合的に分析すると、内容価値および実践意欲の面で高い成果が確認されました。活用意向は 92.8%（「活用したい」57.1%、「とても活用したい」35.7%）、次回までの行動把握も 92.8%が肯定的回答であり、実装可能性は高いと評価できます。研修時間は 78.6%が「ちょうど良い」と回答し、当日学習量も 84.6%が適正と感じており、運営設計は概ね安定しています。開催形式（Zoom）についても 85.7%が肯定的に評価しました。一方で、事前学習量は 71.5%が「多い」と回答し、難易度も約 50%が「難しい」と感じており、負荷設計には改善余地が見られます。また、Facebook によるコミュニケーションは約 86%が「やりにくい」と回答しており、運用基盤の再検討が必要です。総じて、本研修は高い価値と実践意欲を生み出している一方、負荷調整とコミュニケーション環境の最適化が今後の発展課題といえます。

• **研修 2 日目について受講者の声（定性コメント）**：本研修（回答 14 名）の結果を総合的に分析したところ、授業改善に向けた意欲醸成および学校間連携の促進という点で高い成果が確認されました。自由記述では、他校の授業運営上の工夫や課題を共有できたこと、グループワークを通じて主体的な意見交換ができたこと、新たな視点や具体的改善案を得られたことへの評価が多数を占めました。特に、実践を踏まえた上での研修設計が理解を深め、アクションプランの明確化につながったとの声が多く見られました。

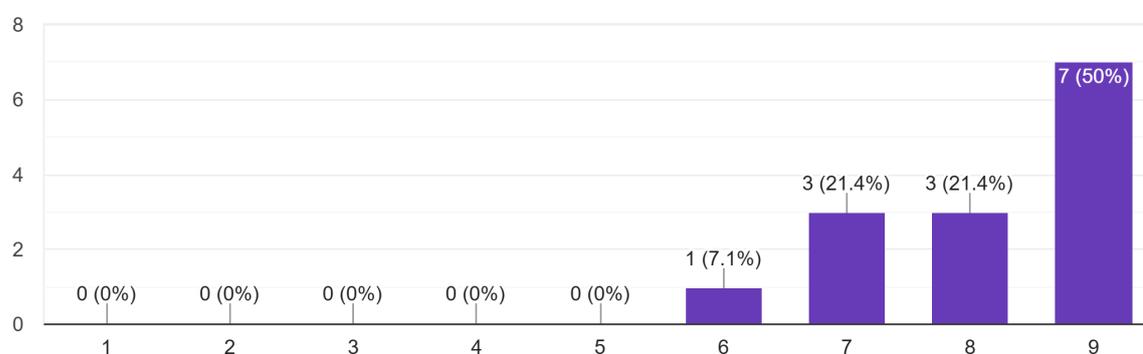
定量評価においても、「活用したい」「とても活用したい」との回答は 92.8%、「次回までにやることを把握できた」も

92.8%と高水準であり、実装可能性の高い研修であったと評価できます。また、研修時間や当日学習量は概ね適正と受け止められていました。一方で、事前学習量や難易度については負荷が高いとの回答も一定数あり、学習進展実感や自信醸成の面には改善余地が示唆されました。今後は、演習機会や成果共有の充実により、理解から実践への転換を一層強化する必要があります。

研修 3

3 日目（令和 7 年 12 月 1 日 月曜日 14:00-17:00 オンライン参集型）のアンケート結果・分析

この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま...（1...つまらなかった、9...おもしろかった）
14 件の回答



指標 数値

平均値 **8.14**

中央値 **9**

最頻値 **9 (50.0%)**

標準偏差 約 **0.95**

8 以上 **71.4% (10 名)**

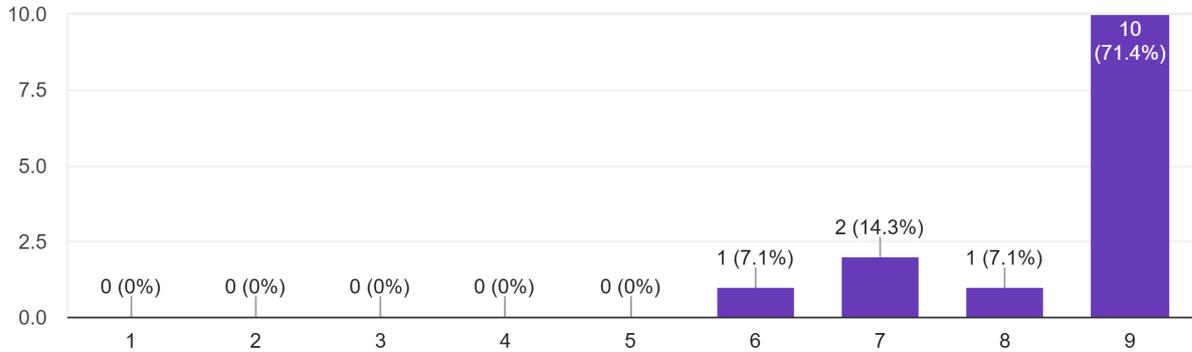
7 以上 **92.9% (13 名)**

6 以下 **7.1% (1 名)**

1~5 **0%**

本設問（1 = つまらなかった、9 = おもしろかった）では、平均 8.14、中央値 9 と非常に高い評価を得ました。回答者 14 名中 13 名（92.9%）が 7 以上を選択し、うち 7 名（50.0%）が最高評価の 9 を付けています。6 以下は 1 名（7.1%）のみで、否定的評価は見られませんでした。標準偏差も小さく、参加者間の体験格差はほぼありません。体験満足度は極めて高水準であり、研修の構成や進行設計が効果的に機能していると評価できます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのくらい近い印象を持ちま...。 (1...眠かった、9...眠くならなかった)
 14件の回答



指標 数値

平均値 **8.43**

中央値 **9**

最頻値 **9 (71.4%)**

標準偏差 約 **0.88**

8以上 **78.6% (11名)**

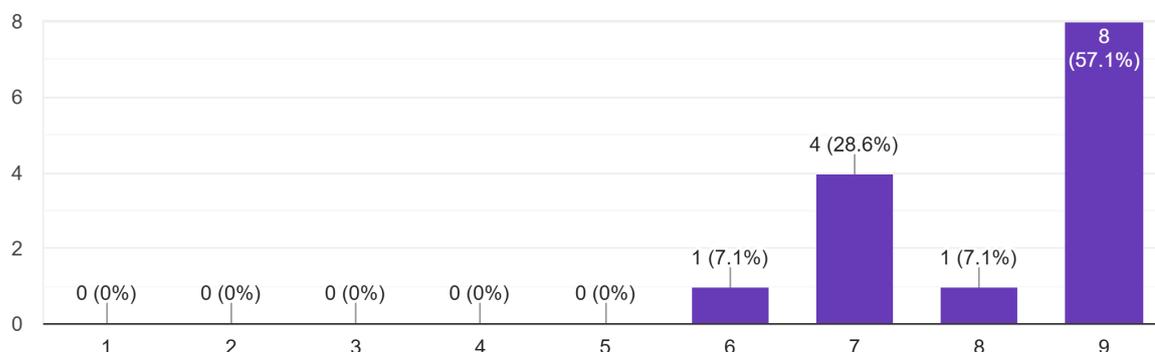
7以上 **92.9% (13名)**

6以下 **7.1% (1名)**

1~5 **0%**

本設問（1＝眠った、9＝眠くならなかった）では、平均 8.43、中央値 9 と非常に高い評価を得ました。回答者 14 名中 13 名（92.9%）が 7 以上を選択し、うち 10 名（71.4%）が最高評価の 9 を付けています。6 以下は 1 名（7.1%）のみで、1～5 の低評価はありませんでした。標準偏差も小さく、参加者間の体験差はほとんど見られません。研修の進行や構成は高い集中度を維持できており、学習環境として極めて良好であったと評価できます。

この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...をそそられなかった、9...好奇心をそそられた)
14件の回答



指標 数値

平均値 **8.14**

中央値 **9**

最頻値 **9 (57.1%)**

標準偏差 **約 0.99**

8以上 **64.3% (9名)**

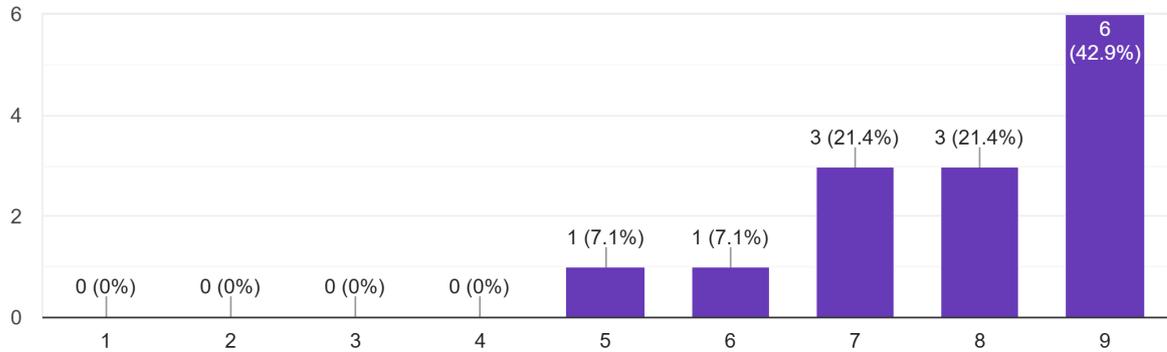
7以上 **92.9% (13名)**

6以下 **7.1% (1名)**

1～5 **0%**

本設問（1＝好奇心をそそられなかった、9＝好奇心をそそられた）では、平均 8.14、中央値 9 と非常に高い評価を得ました。回答者 14 名中 13 名（92.9%）が 7 以上を選択し、うち 8 名（57.1%）が最高評価の 9 を付けています。6 以下は 1 名（7.1%）のみで、1～5 の低評価はありませんでした。標準偏差も小さく、参加者間の体験差はほとんど見られません。研修は強い関心喚起に成功しており、内容や進行設計が効果的に機能していると評価できます。

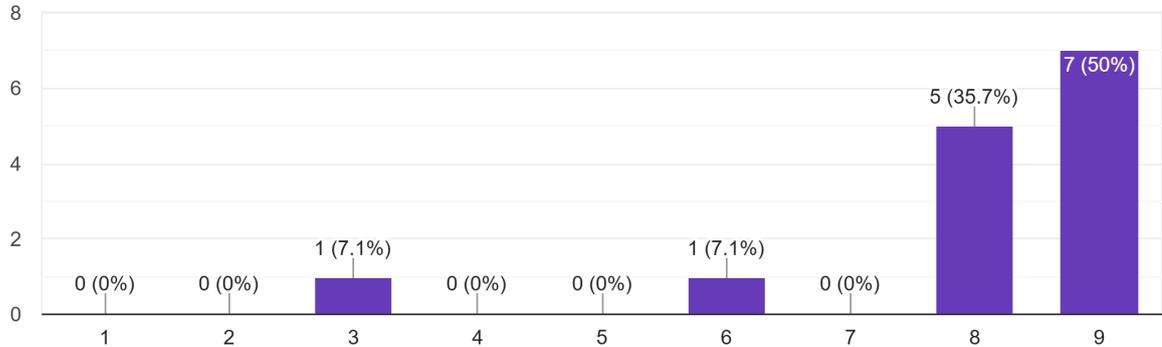
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま...（1...マンネリだった、9...おもしろかった）
 14件の回答



指標	数値
平均値	7.93
中央値	8
最頻値	9 (42.9%)
標準偏差	約 1.21
8以上	64.3% (9名)
7以上	85.7% (12名)
6以下	14.3% (2名)
1~4	0%

本設問（1＝マンネリだった、9＝おもしろかった）では、平均 7.93、中央値 8 と高い評価を得ました。回答者 14 名中 12 名（85.7%）が 7 以上を選択し、うち 9 名（64.3%）が 8 以上、6 名（42.9%）が最高評価の 9 を付けています。1～4 の低評価はなく、マンネリ感はほとんど見られませんでした。体験満足度は総じて高水準であり、研修の構成や進行設計が効果的に機能していると評価できます。今後はこの強みを維持しつつ、さらなる質の向上を図ることが求められます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち.....やりがいなかった、9...やりがいがあった)
 14件の回答



指標 数値

平均値 **8.29**

中央値 **9**

最頻値 **9 (50.0%)**

標準偏差 約 **1.55**

8以上 **85.7% (12名)**

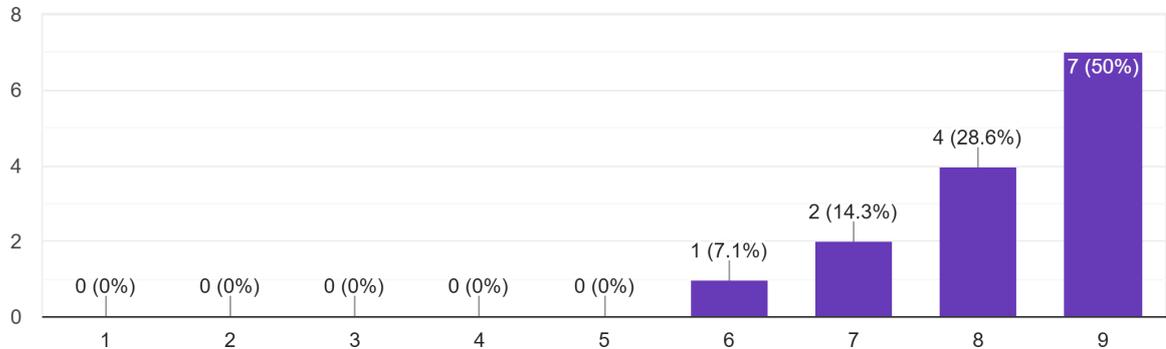
7以上 **85.7% (12名)**

6以下 **14.3% (2名)**

1~2 **0%**

本設問（1＝やりがいなかった、9＝やりがいがあった）では、平均 8.29、中央値 9 と非常に高い評価となりました。回答者 14 名中 12 名（85.7%）が 8 以上を選択し、うち 7 名（50.0%）が最高評価の 9 を付けています。6 以下は 2 名（14.3%）のみで、否定的評価は見られませんでした。研修は参加者に強い達成感や意義を感じさせる内容であり、内発的動機づけの醸成に成功していると評価できます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...分には無関係だった、9...自分に関係があった)
 14件の回答



指標 数値

平均値 **8.21**

中央値 **9**

最頻値 **9 (50.0%)**

標準偏差 約 **1.03**

8以上 **78.6% (11名)**

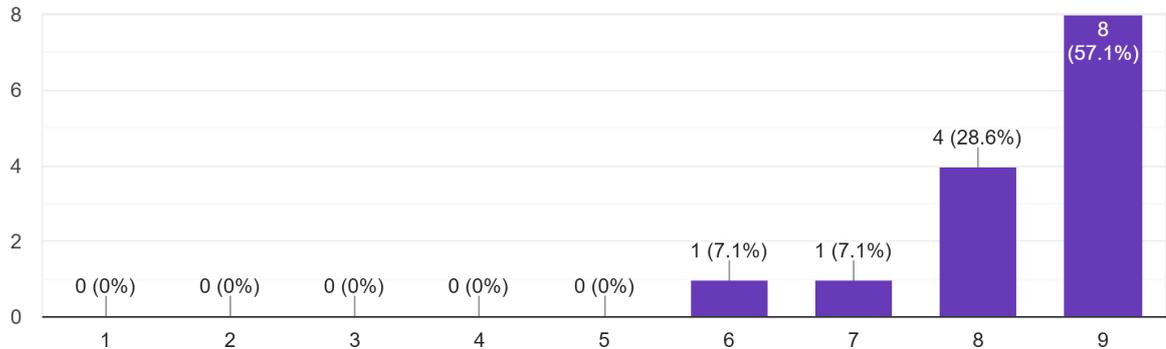
7以上 **92.9% (13名)**

6以下 **7.1% (1名)**

1～5 **0%**

本設問（1＝自分には無関係だった、9＝自分に関係があった）では、平均 8.21、中央値 9 と高い評価を得ました。回答者 14 名中 13 名（92.9%）が 7 以上を選択し、うち 11 名（78.6%）が 8 以上、7 名（50.0%）が最高評価の 9 を付けています。6 以下は 1 名（7.1%）のみで、1～5 の低評価はありませんでした。研修内容は参加者の実務や課題と強く結びついており、高い当事者意識の醸成に成功していると評価できます。

この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...いい内容だった、9...身につけたい内容だった)
14件の回答



指標 数値

平均値 **8.36**

中央値 **9**

最頻値 **9 (57.1%)**

標準偏差 約 **0.93**

8以上 **85.7% (12名)**

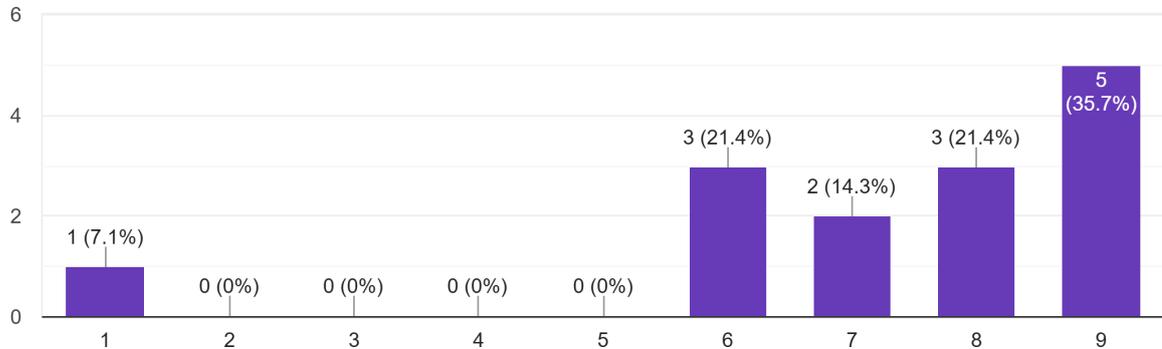
7以上 **92.9% (13名)**

6以下 **7.1% (1名)**

1~5 **0%**

本設問（1=いい内容だった、9=身につけたい内容だった）では、平均8.36、中央値9と非常に高い評価を得ました。回答者14名中13名（92.9%）が7以上を選択し、うち12名（85.7%）が8以上、8名（57.1%）が最高評価の9を付けています。6以下は1名（7.1%）のみで、否定的評価は見られませんでした。研修内容は単なる満足にとどまらず、実践意欲を強く喚起する水準に達しており、行動変容につながる可能性が高いと評価できます。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...楽しくなかった、9...途中の過程が楽しかった)
 14件の回答



指標 数値

平均値 **7.29**

中央値 **8**

最頻値 **9 (35.7%)**

標準偏差 **約 2.07**

8以上 **57.1% (8名)**

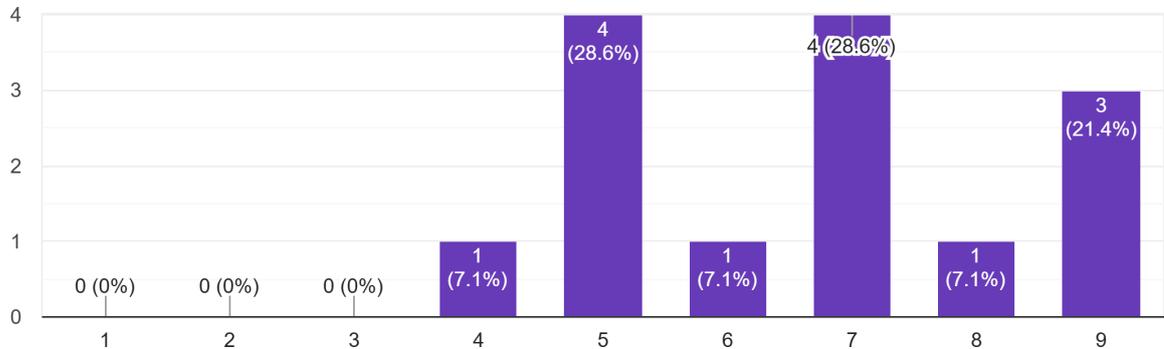
7以上 **71.4% (10名)**

6以下 **28.6% (4名)**

1評価 **7.1% (1名)**

本設問（1＝楽しくなかった、9＝途中の過程が楽しかった）では、平均 7.29、中央値 8 となり、概ね良好な評価でした。回答者 14 名中 10 名（71.4%）が 7 以上を選択し、うち 8 名（57.1%）が 8 以上、5 名（35.7%）が最高評価の 9 を付けています。一方で 6 以下が 4 名（28.6%）、最低評価 1 が 1 名（7.1%）見られ、他設問と比較するとややばらつきがありました。楽しさは一定水準で確保されているものの、体験の質の均質化が今後の課題と考えられます。

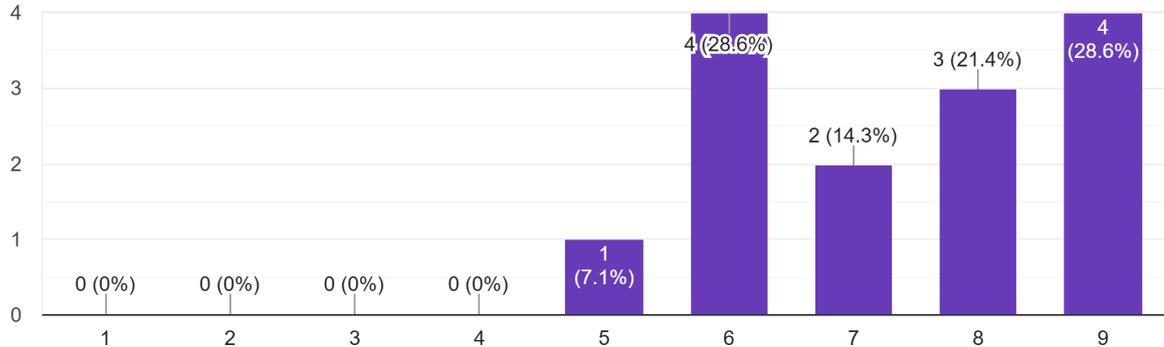
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...（1...自信がつかなかった、9...自信がついた）
 14件の回答



- 指標 数値**
- 平均値 **6.57**
 - 中央値 **7**
 - 最頻値 **5・7 (各 28.6%)**
 - 標準偏差 約 **1.58**
 - 7以上 **57.1% (8名)**
 - 8以上 **28.6% (4名)**
 - 5以下 **35.7% (5名)**
 - 4以下 **7.1% (1名)**

本設問（1＝自信がつかなかった、9＝自信がついた）では、平均 6.57、中央値 7 となり、一定の自信向上は見られました。回答者 14 名中 8 名（57.1%）が 7 以上を選択した一方で、5 以下が 5 名（35.7%）存在し、他設問と比べるとやや評価が分かれる結果となりました。研修内容への満足度ややりがいは高水準であったものの、「理解」から「自信」への転換にはさらなる実践機会や成功体験の設計が必要であることが示唆されます。

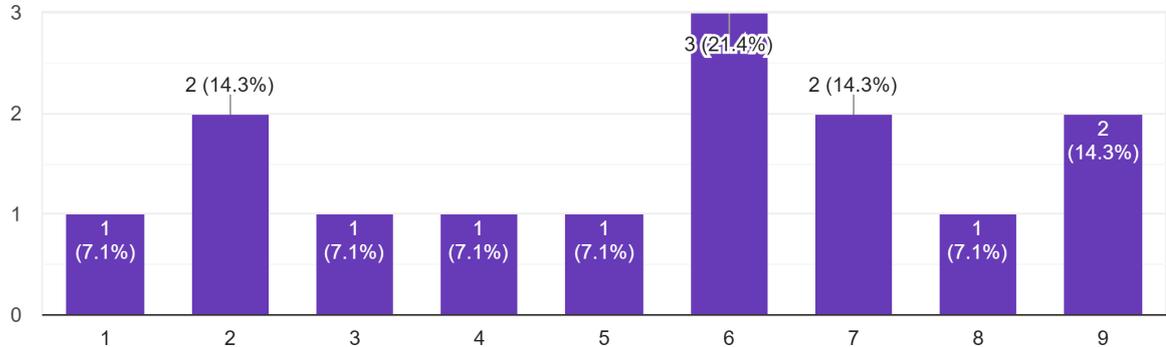
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...あいまいだった、9...目標がはっきりしていた)
 14件の回答



指標	数値
平均値	7.21
中央値	7.5
最頻値	6・9 (各 28.6%)
標準偏差	約 1.28
7以上	64.3% (9名)
8以上	50.0% (7名)
6以下	35.7% (5名)
1~4	0%

本設問（1＝あいまいだった、9＝目標がはっきりしていた）では、平均 7.21、中央値 7.5 となり、概ね目標は明確に伝わっていたと評価できます。回答者 14 名中 9 名（64.3%）が 7 以上、7 名（50.0%）が 8 以上を選択しました。一方で 6 以下も 5 名（35.7%）見られ、理解度に一定のばらつきが確認されました。目標設定は概ね適切であるものの、冒頭での到達目標の再提示や振り返りの強化により、さらなる認識の均質化が期待されます。

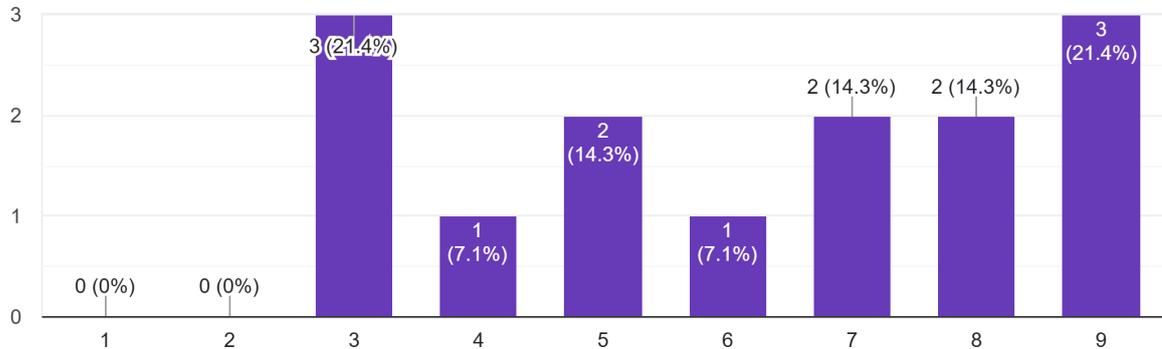
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...められなかった、9...学習を着実に進められた)
 14件の回答



指標	数値
平均値	5.21
中央値	6
最頻値	6 (21.4%)
標準偏差	約 2.34
7以上	35.7% (5名)
6以下	64.3% (9名)
4以下	35.7% (5名)

本設問（1 = 学習を進められなかった、9 = 学習を着実に進められた）では、平均 5.21、中央値 6 となり、進捗実感は中間水準にとどまりました。回答者 14 名中 7 以上は 5 名（35.7%）に対し、6 以下が 9 名（64.3%）と多数を占め、評価のばらつきも大きい結果でした。満足度ややりがいが高評価であった一方、学習の「着実さ」の実感には改善余地があると考えられます。今後は小目標の明確化や進捗の可視化を強化し、達成感の積み重ねを設計することが重要です。

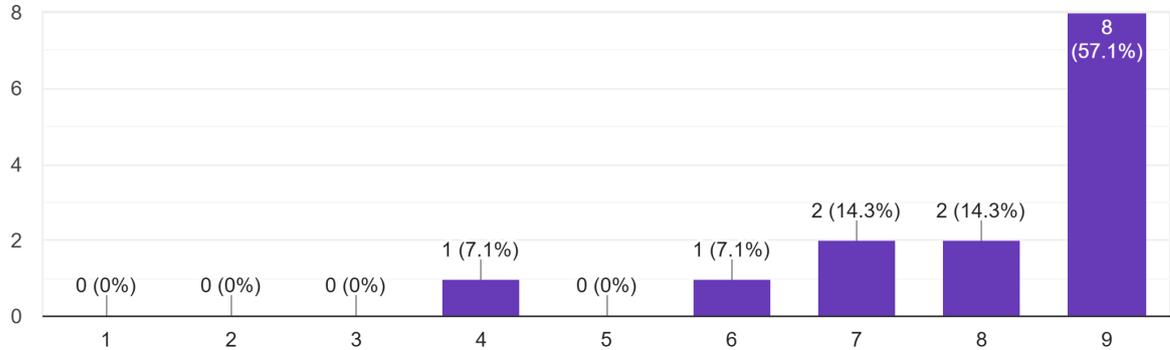
この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...ができなかった、9...自分なりの工夫ができた)
14件の回答



指標	数値
平均値	6.00
中央値	6.5
最頻値	3・9 (各 21.4%)
標準偏差	約 2.08
7以上	50.0% (7名)
6以下	50.0% (7名)
4以下	28.6% (4名)

本設問（1＝工夫できなかった、9＝自分なりの工夫ができた）では、平均 6.00、中央値 6.5 となり、主体的な工夫の実感は中間水準でした。回答者 14 名のうち 7 名（50.0%）が 7 以上を選択する一方、4 以下も 4 名（28.6%）見られ、評価の二極化傾向が確認されました。主体的に取り組めた層は一定数存在するものの、全体としては体験の質にばらつきがあります。今後は選択型課題や途中フィードバックを強化し、工夫を引き出す設計の充実が求められます。

この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ちま…。 (1…不満が残った、9…やってよかった)
14件の回答



指標 数値

平均値 **8.29**

中央値 **9**

最頻値 **9 (57.1%)**

標準偏差 約 **1.35**

8以上 **71.4% (10名)**

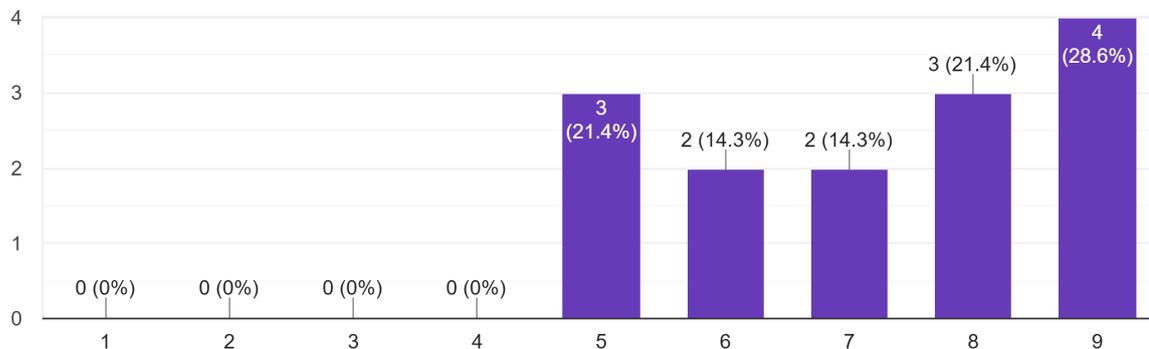
7以上 **85.7% (12名)**

6以下 **14.3% (2名)**

1～3 **0%**

本設問（1＝不満が残った、9＝やってよかった）では、平均 8.29、中央値 9 と非常に高い評価となりました。回答者 14 名中 12 名（85.7%）が 7 以上を選択し、うち 10 名（71.4%）が 8 以上、8 名（57.1%）が最高評価の 9 を付けています。6 以下は 2 名（14.3%）にとどまり、1～3 の否定的評価はありませんでした。研修全体に対する満足度は極めて高く、参加価値を強く実感していただいた結果と評価できます。

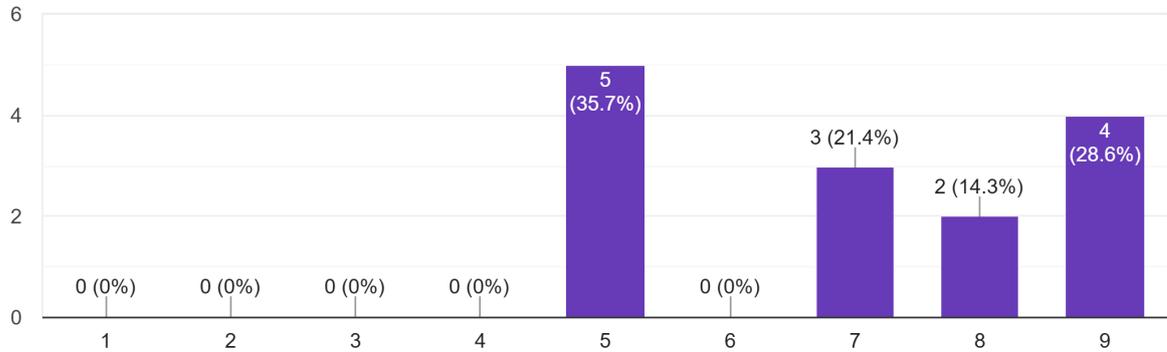
この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...ぐには使えそうもない、9...すぐに使えそうだ
 14件の回答



指標	数値
平均値	7.00
中央値	7
最頻値	9 (28.6%)
標準偏差	約 1.41
7以上	64.3% (9名)
8以上	50.0% (7名)
6以下	35.7% (5名)
4以下	0%

本設問（1＝すぐには使えそうもない、9＝すぐに使えそうだ）では、平均 7.00、中央値 7 となり、即実践性は概ね良好な水準でした。回答者 14 名中 9 名（64.3%）が 7 以上を選択し、うち 7 名（50.0%）が 8 以上、4 名（28.6%）が最高評価の 9 を付けています。一方で 5・6 の中間層も 5 名（35.7%）存在し、即断即決レベルにはややばらつきが見られました。今後は具体的な導入手順や事例提示を強化することで、実装確度のさらなる向上が期待されます。

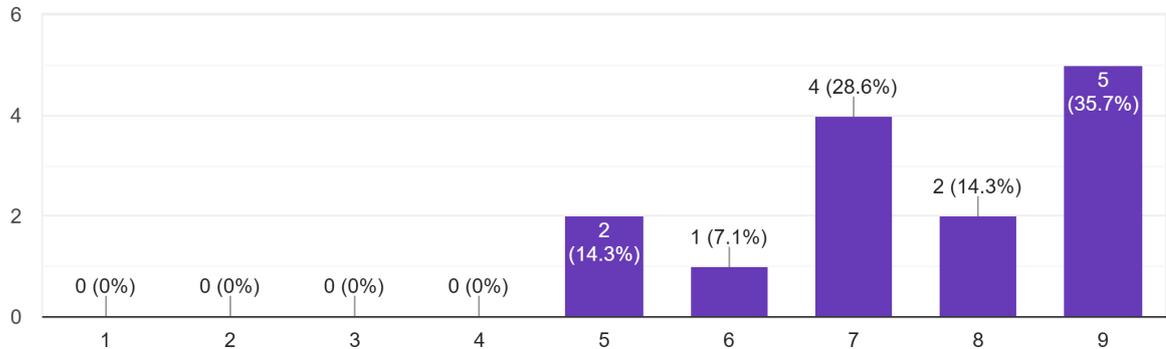
この研修全体について、
次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...もらえなかった、9...できたら認めてもらえた)
14件の回答



指標	数値
平均値	7.00
中央値	7
最頻値	5 (35.7%)
標準偏差	約 1.53
7以上	64.3% (9名)
8以上	42.9% (6名)
5のみ	35.7% (5名)
4以下	0%

本設問（1＝認めてもらえなかった、9＝できたら認めてもらえた）では、平均7.00、中央値7となり、承認実感は概ね良好な水準でした。回答者14名中9名（64.3%）が7以上を選択し、うち6名（42.9%）が8以上、4名（28.6%）が最高評価の9を付けています。一方で最頻値は5（35.7%）であり、強い承認実感にまでは至っていない層も一定数存在します。今後は成果共有や即時フィードバックを強化し、承認の質と強度を高めることが重要です。

この研修全体について、
 次の形容詞のどちらかにどのぐらい近い印象を持ち...一貫性が無かった、9...評価に一貫性があった)
 14件の回答



指標 数値

平均値 **7.36**

中央値 **7.5**

最頻値 **9 (35.7%)**

標準偏差 約 **1.28**

7以上 **78.6% (11名)**

8以上 **50.0% (7名)**

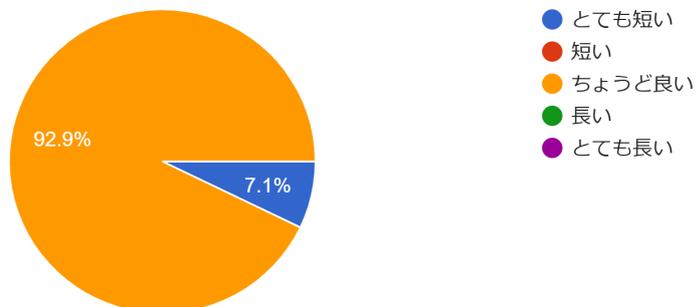
6以下 **21.4% (3名)**

4以下 **0%**

本設問（1＝評価に一貫性がなかった、9＝評価に一貫性があった）では、平均 7.36、中央値 7.5 と良好な評価となりました。回答者 14 名中 11 名（78.6%）が 7 以上を選択し、うち 7 名（50.0%）が 8 以上、5 名（35.7%）が最高評価の 9 を付けています。6 以下は 3 名（21.4%）にとどまり、全体として評価の一貫性は概ね確保されていたと考えられます。今後は評価基準のさらなる明確化と共有を進めることで、透明性と納得感の向上が期待されます。

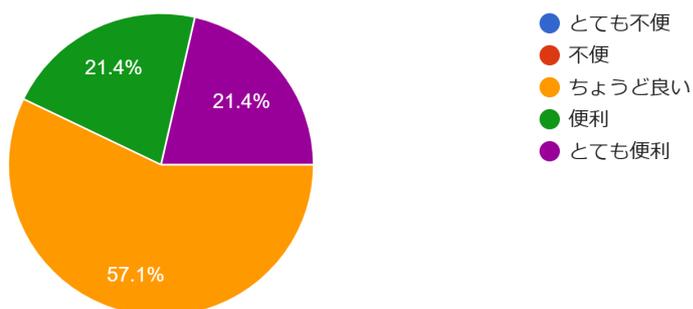
2a 今日の研修の長さ(3時間)はいかがでしたか。

14件の回答



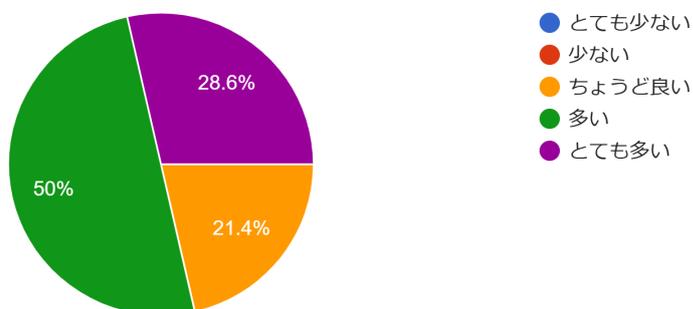
2b 今日の開催場所（オンライン ZOOM）はいかがでしたか。

14件の回答

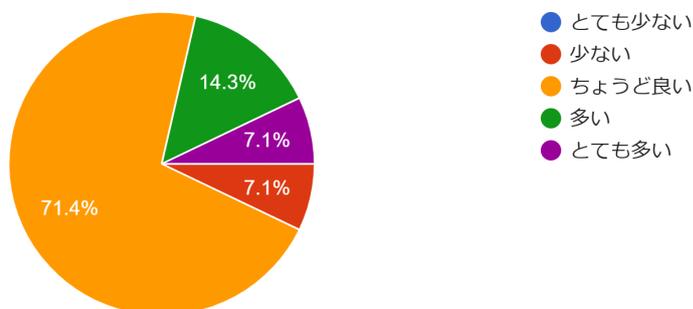


2c 今日の研修の事前学習の量はいかがでしたか。

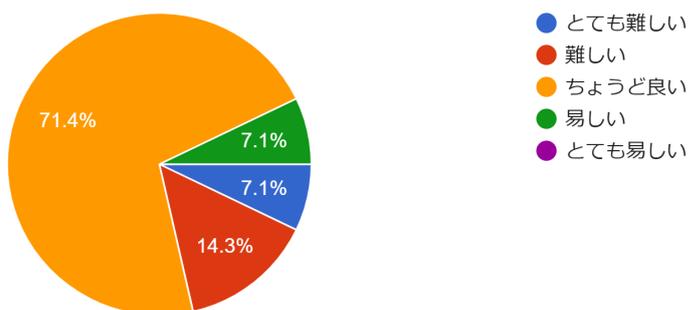
14件の回答



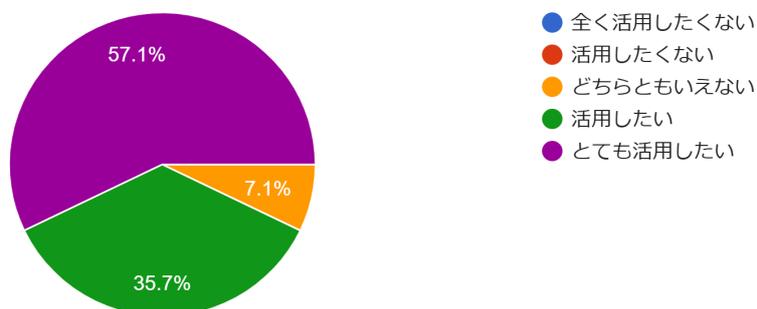
2d 今日の研修で扱った学習内容の量はいかがでしたか。
14件の回答



2e 今日の研修で扱った学習内容の難易度はいかがでしたか。
14件の回答

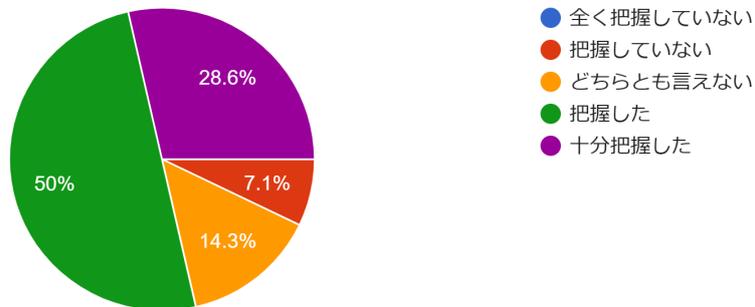


2f 今日の研修で学んだ内容を自校の授業改善支援に活用したいですか。
14件の回答



2g 最終課題としてやることを把握できましたか。

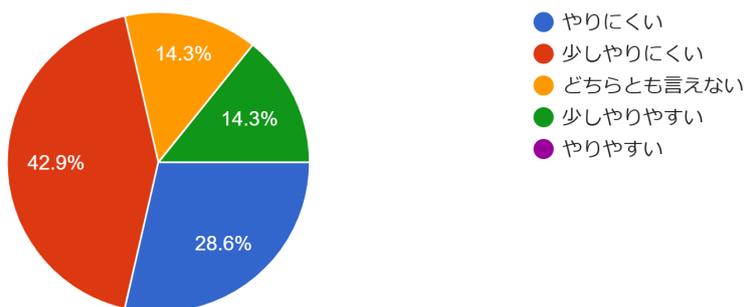
14件の回答



2h

(Day2からの期間で) facebookグループを使...コミュニケーションをとることについてどう思いますか。

14件の回答



本研修（参加者 14 名）の実施結果についてご報告いたします。まず運営面では、研修時間（3 時間）について「ちょうど良い」が 92.9%と極めて高く、時間設計は適切であったと評価できます。オンライン開催（Zoom）についても「不便」の回答はなく、全体として円滑な実施環境が確保されました。

学習量および難易度については、当日学習量を「ちょうど良い」とした回答が 71.4%、難易度も「ちょうど良い」が 71.4%となり、内容設計は概ね適正水準にあります。一方、事前学習量については「多い以上」が 78.6%とやや高く、今後は負荷調整の検討が必要です。

行動転換指標では、「自校の授業改善支援に活用したい」が 92.8%と非常に高く、実践意欲の醸成に成功しております。また、最終課題の把握についても 78.6%が「把握できた以上」と回答し、目標理解は十分に浸透していると判断できます。

一方で、研修期間中の Facebook グループ活用については 71.5%が「やりにくい」と回答しており、オンラインコミュニケーション設計が今後の主要な改善課題です。総じて、本研修は設計面・内容面ともに高い成果を上げており、実践段階への移行を支援する体制強化が次の重点事項となります。

● **研修3日目について受講者の声（定性コメント）**：本研修では、参加教員同士の相互刺激と実践的学びが大きな成果として挙げられました。各先生方の専門性が高く、特にID（インストラクショナル・デザイン）に関する具体的助言

や、モジュール C における授業目標高度化の視点は新鮮で実践的であったとの声が多く見られました。グループ活動では授業改善の具体事例やツール活用例が共有され、実技系授業への応用可能性も示されました。Google Document 等の活用により情報共有が円滑に行われ、懇親会を通じた学校間交流からは福島・沖縄間の連携イベント構想など、新たな協働の芽も生まれました。また、他校の実践発表や講師からの総括コメントにより理解が深化し、自己の授業を客観視する契機となったとの意見も多く確認されました。さらに、「自校で FD 活動を実施するきっかけになった」「突破口が見えた」との声もあり、研修は知識習得にとどまらず、行動変容への動機づけを強く促進する機会となりました。

総論

本研修シリーズ（1～3）は、参加者の満足度・当事者意識・活用意欲のいずれにおいても高水準を示し、全体として成功裡に実施されたと評価できます。特に「やってよかった」「活用したい」「自分に関係があった」等の設問では平均 8 点前後の高評価が継続しており、研修設計は参加者の実務課題と強く接続していたことが確認されました。また、学校間交流やグループワークを通じた相互刺激は、知識習得を超えて行動変容への動機づけを促進する効果を生んでいます。

一方で、「学習を着実に進められた」「自信がついた」「自分なりの工夫ができた」といった実行・定着に関わる指標では平均値が相対的に低く、ばらつきも見られました。これは理解・納得段階から実装・自走段階への移行において支援設計の強化余地があることを示唆しています。特に進捗可視化、成功体験の設計、継続的フォローアップの仕組み整備が今後の鍵となります。

総じて、本研修は「動機づけ・方向付け」の段階では高い成果を挙げており、次段階としては「実践定着・組織化」への橋渡しを強化することが求められます。シリーズとしての継続性を活かし、個人の学びを組織的授業改善へと発展させる体制整備が今後の重点課題です。

第5章 受講者成果物（ワークシート、アクションプラン等）

令和7年度研修の受講者成果物の一例を以下提示します。

※アクションプラン

行動計画（立案日：2025年10月10日）				省察	
週で重複すること	アクションの詳細計画			プランに対する省察	
	(1)授業コンテント設計書への施案 (課と)何を目標にして	(2)授業改善レポート案 (課と)何を目標にして	(3)自身の知識・スキル開発 (課と)何を目標にして	達成度(5段階で評価) 1:全く達成しなかった 5:目標を達成した	実施して思ったこと・感じたことなど
1週間以内に行うこと（期日＝2025年10月14日）				省察（実施日：2025年10月14日）	
Week 1	研修1の振り返り 個人職員と授業設計の基本を研修で実践し、個人職員は授業改善の経験やPDCAによる改善を共有する	私は教員の授業改善のため、授業改善を実施する	私は研修1のEラーニングについて学び直し、職員に分かりやすく説明できるようにする	(1)3 (2)3 (3)3	授業改善の前後の改善によりPDCAによる改善が実現した
2週間以内に行うこと（期日＝2025年10月20日）				省察（実施日：2025年10月20日）	
Week 2	研修1の振り返り 個人職員研修に対して、目標設定についてSMART目標の観点で行動目標を作成する改善目標を作成する	私は教員の授業改善のため、授業改善を実施する	私は研修1のEラーニングについて学び直し、職員に分かりやすく説明できるようにする	(1)3 (2)3 (3)3	同じ授業者に対して同じような授業改善が実施されている
3週間以内に行うこと（期日＝2025年10月27日）				省察（実施日：2025年10月27日）	
Week 3	研修2の事前学習 研修2の事前学習に関する研修内容を共有し、授業コンテント設計について理解を深める	私は教員の授業改善のため、授業改善を実施する	私は研修1のEラーニングについて学び直し、職員に分かりやすく説明できるようにする	(1)3 (2)3 (3)3	事前学習により、新たな授業改善の方法を知ることができた
4週間以内に行うこと（期日＝2025年11月4日）				省察（実施日：2025年11月4日）	
Week 4	研修2の事前学習 研修2の事前学習に関する研修内容を共有し、授業コンテント設計について理解を深める	私は教員の授業改善のため、授業改善を実施する	インストラクショナルデザインの職員101を読み進める	(1)3 (2)3 (3)3	日々の授業改善は継続して取り組んで、教員への研修を併せて実施したいという考えがある

※授業評価票（自己評価）

授業評価票（自己評価）		授業評価ルーブリック表（自己評価）				
日時	令和 年 月 日 ()	時間	授業者	科目	単元	学年
授業前に記入しておく						
授業概要						
本時の内容	何を学習するか					
本時の目標	授業終了時に達成可能な（学生が到達度を振り返り可能な）					
本時の流れ	例：説明・提示→実習→振り返り					
評価基準 4…よくできている 3…概ねできている 2…改善の余地がある 1…未着手である						
P2の「授業評価ルーブリック表」により、自己評価してください。						
1 社会の急激な変化と専門分野の進歩に対応するために	評価	①ICTを活用している（画像・動画、Google Forms等）	②講義・示認だけでなく、学生主体の個別・協働学習の形態も取り入れている	③「振り返り」の時間を設け、目標に対する到達度（成果と課題）を確認している	④90分の時間配分や活動の変化等を取り入れ、学生の集中力を維持する工夫をしている	⑤学生が達成感を感じやすいモジュールステップで課題や実習手順を細分化している
2 PDCAサイクルの授業設計で成長を遂げる学びを重視するために	評価	①授業はタイムとともに開始・終了し、履修条件を満たす時間を確保している	②本時の授業はシラバスの計画と合致している	③「本時の目標」は学生を主眼とした測定可能な具体的な学習目標となっている	④授業開始時に「本時の目標」「授業の流れ」を提示し、見通しの立つ授業を実施している	⑤「振り返り」の時間を設け、目標に対する到達度（成果と課題）を確認している
3 多様な学生を支えるために	評価	①90分の時間配分や活動の変化等を取り入れ、学生の集中力を維持する工夫をしている	②学生が達成感を感じやすいモジュールステップで課題や実習手順を細分化している	③授業では板書、プリント、スライドの文字の大きさ、ポイント・色等を配慮している	④理解度の確認や実践の観察により、その場で適切な助言や修正をしている	⑤学生の良い点や成果を積極的にほめるポジティブ・フィードバックを重視している
4 安全で安心な学びの場をつくるために	評価	①学生により言葉遣いや呼称を変えないなど、どの学生にも公平に接している	②学生の人格を尊重しハラスメント（発言・体罰・無視等）のない学びの場となっている	③学生が尊厳や質問を自由に言える心理的安全性のある学習環境がある	④教員が6S（整理・整頓・清掃・清潔・静・安全）を率先実践し、学生にも守らせている	⑤けがや器具等の破損を防ぐための、実習における安全管理を徹底している
5 授業評価ルーブリック表	評価	1 ①ICTの活用	2 ①学生主体の活動	3 ①授業時間管理	4 ①シラバスとの整合性	5 ①本時の目標
6 ①ICTの活用	4	2	3	2	1	2
7 ①学生主体の活動	4	3	2	3	2	3
8 ①授業時間管理	4	3	2	3	2	3
9 ①シラバスとの整合性	4	3	2	3	2	3
10 ①本時の目標	4	3	2	3	2	3

※授業改善サポーター実施報告書

作成日 2025年11月1日

██████████

+

授業改善サポーター実施報告書

(報告時期：研修1~研修2)

+

1 報告書タイトル

授業視察見学報告書

2 エグゼクティブサマリー

██████████の実習授業の視察見学の実施。授業評価・改善を行う。

3 背景

ゲーム制作業界への就職に向けた3DCG制作実習の見学。

4 授業改善サポートの目的

学生に対し、教員が一方的な授業になっていないか、また業界需要のある制作をしているかを
確認することを目的とした

5 サポーターの役割と活動内容

・業界の求める授業が出来ているかを客観的な視点から支援・助言を行う。

・学生の様子について、フィードバックする。

6 実施方法

・次年度卒業年次生向けの3DCG実習にて実施

7 実施過程

・10/16 コンテスト向け3DCG制作を行う事をアナウンスし、実制作スタート。

・中間発表として23日の授業での発表に向け制作を行う。

・個別指導で、習熟度をはかり、発表、採点する。

8 支援活動の結果

・アナウンス時に、学生への視線が覆れていなかった、画面のみを見て喋っていたため奥の机の
学生に声が届いていなかった点などの気づきがあった。

9 支援活動の評価と分析

・今回の授業では、コンテストの説明から実制作の個別指導までを実施。12月まで継続している
内容。また、実際にコンテストに入賞した際には、学生の就職に向けて大きな一歩となるため、
継続的に観察、改善を促していく。

10 更なる改善のための推奨事項と次のステップ

・教員向けのフィードバックは出来ていたが、本当に学生は分かっているかは表面上でしか観測
できなかったため、Microsoft Formsを使った目安箱のような気楽な相談所を設け、理解できてい
なかった点、フィードバックでの不明点を聞き出すようにしていく。

11 反省点と学び

・学生の発表においては、成果物でのみだったため、分かり辛い点があったので、思いを伝える
ための資料を作成するように指示を出す。

※自己評価シート

記入日：2025年12月4日

授業改善サポーター育成講座 自己評価シート

次の自己評価シートを記入して、アクションプランと一緒に提出してください。提出期限は、研修3が終了して1週間とします。

本講座の目標は3つありました。それぞれの目標に対し、本講座を受講することで達成しようとしていたレベルまで達成できたか、この講座を通して目標に関連して何を学び、何を実施し、何ができるようになったか、目標達成のために難しいと考えていることを記述してください。また、これらの目標に対し、次にどのようなことをすべきか新しい目標を設定してください。

目標	講座で達成しようとした目標と達成度	講座での学び、実施したこと	講座を通してできるようになったこと	目標達成のための困難点、疑問点など	次の目標、やるべきこと
授業改善サポーターとして、各種ツールを活用して授業改善のためのコンサルテーションを行うことができる	★★★★☆	・授業評価の観点整理、ルーブリック作成方法を学んだ。 ・授業改善提案の手順（現状把握→課題抽出→施策提案）を理解。 ・授業見学時に活用できる観点チェックツールを試作した。	・授業改善の相談を受け、具体的な改善ポイントを助言できる。 ・ICTツール・フィードバック手法を組み合わせた改善案立案。	・教員の授業観や経験によって受け入れられない場合の対応。 ・継続的改善に向けたフォロー体制の構築がまだ不十分。	・教員との信頼構築スキルの向上。 ・授業見学後のフィードバック面談フローを標準化し、試行する。
自校における授業コンサルテーションの普及を目指した施策を、個	★★★★☆	・学校全体の授業改善サイクル(PCOA)に沿った提案の重要性を理解。	・小規模単位で改善施策の提案・実践を開始（例：OC）における体験。	・組織全体を巻き込む具体的な戦略がまだ弱い。 ・人員や時間	・「授業改善共有会（ミニ研修会）」の定期開催を提案。

人レベル、組織レベルで提案することができる		・授業改善の事例を収集し、学科内情報共有	・授業改善の事例を収集し、管理職への改善効果報告の仕組みを意識できるようになった	・制限があり、改善の優先度を明確にする必要あり	・成功事例の可視化、効果測定を導入
授業改善サポーターとして相談し支援し合えるコミュニティを形成する	★★★★☆	・他学科教員との意見交換の中で、課題の共通性を実感。 ・授業改善に関する情報交換を開始	・困ったときに相互相談できる関係が一部構築できた。 ・コミュニティ形成の目的を明確に認めるようになった	・対面機会の少なさと、情報共有の場が限定されている。 ・講座終了後の継続的なコミュニティ運営が未整備	・授業改善に特化した学内オンライン掲示板・チャットの整備。 ・授業見学の同行・共有文化を醸成する

※教育支援システム開発概要書

教育支援システム開発 概要書

1. 開発の背景

授業現場では、学生の習熟度の差や学習進度の個人差が大きいこともあり、教員が一人ひとりの状況を把握して適切に即時支援できないことがある。また、学生自身も自分の学習理解度を客観的に把握できないこともあり、授業へのモチベーションや到達意欲の低下が課題。

学習データを活用し、「学生の理解度の可視化」「教員による即時支援」学習支援システムを構築。

2. 目的

学生： 授業ごとの学習理解度を可視化、自分の弱点や課題を自立的に確認・改善できるようにする。
 教員： 学生の学習状況をリアルタイムに把握、授業中や個別指導で適切な支援を行えるようにする。

3. 利用者・利用場面

利用	利用のタイミング	主な活用目的
学生	授業中・授業後	自身の理解度の確認、トラブルシューティング、学習履歴の把握
教員	授業前・授業中・授業後	学生の習熟度確認、進捗が遅れている学生への支援、履歴保存と共有

4. システムの概要

学習支援 LMS (Learning Management System) として以下の機能を開発・運用。

◇主な機能

学習理解度の可視化

学生自身のテスト結果・課題提出・授業アンケートなどを自動集計

理解度をリーダーボードやスコアで表示。

教員向けダッシュボード

各学生・クラス単位での習熟状況を一覧表示。

「進捗が遅まっている学生」や「未提出が多い学生」を自動抽出。

授業内支援連携

授業中に教員が学生の理解度を確認しながらリアルタイムに対応。

チャット・コメント機能による個別指導メモの共有。

履歴保存・共有

学生ごとの学習履歴を蓄積し、学期ごとの成長を可視化。

教員間で履歴を共有し、次年度の授業改善に活用可能。

5. 特徴と一般的な LMS との違い

項目	一般的な LMS	本システムの特徴
主な目的	学習管理・成績登録	学習支援と授業内活用を重視
データ活用	成績・提出状況中心	習熟度・理解度・トラブル履歴を統合的に管理
教員の使い方	成績管理	授業内のリアルタイム支援ツールとして使用
学生の使い方	課題提出・確認	自己分析・振り返り・改善サイクルの支援

6. 期待される効果

◆学生側

学習の効率化（自分の弱点・理解度を明確に把握）

自身の成長を実感でき、学習意欲の向上

学習目標の明確化と自己管理能力の強化

◆教員側

学習に問題を抱える学生の早期発見・対応

授業改善・個別支援の効率化

学習履歴の保存による教員間連携と継続的な教育改善の促進

7. 運用にあたって

試験的に一部授業で導入し、運用実験を実施

学習分析データの蓄積を進め、AI による自動支援提案を検討

他学科や他校への展開を視野に、教育支援インフラとして発展させる

8. 参考・関連ツール

「クラスチェック」(学生到達度可視化)

「シラバスチェック」(シラバス・コマシラバス改善支援)

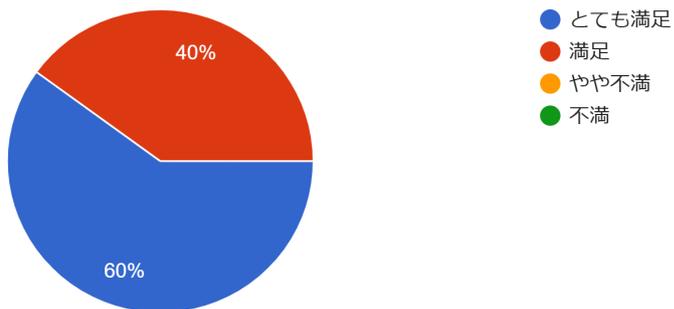
これらの要素を統合し、「授業中に活用できるリアルタイム学習支援 LMS」として発展させる。

第6章 フォローアップ講座分析

令和8年1月9日金曜日 16:00-17:30 デジタルハリウッド大学駿河台キャンパスにて(対面参加型)のアンケート結果・分析

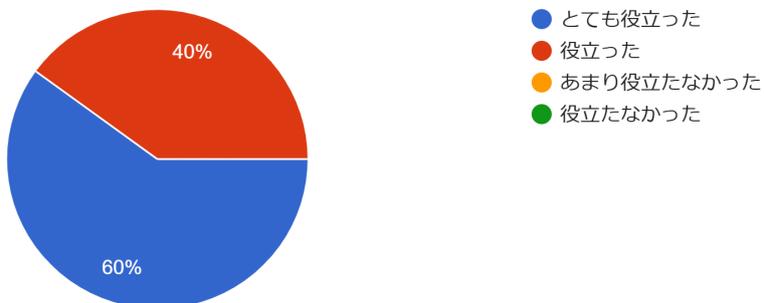
本日のフォローアップ講座全体の満足度を教えてください。

5件の回答

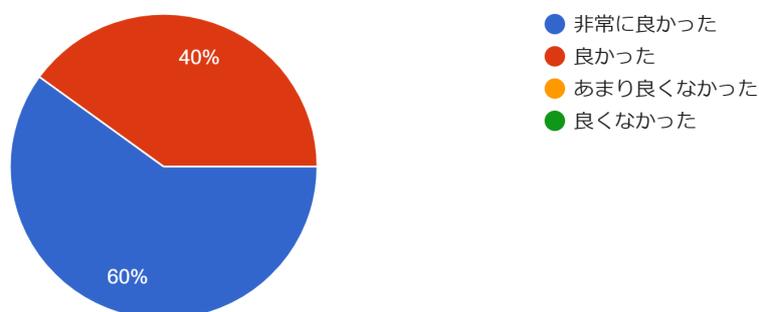


講座の内容は、ご自身の学びや実践に役立つものでしたか。

5件の回答



武蔵野大学鈴木先生・熊本大学の合田先生によるプチセミナー・相談会はいかがでしたか。
5件の回答



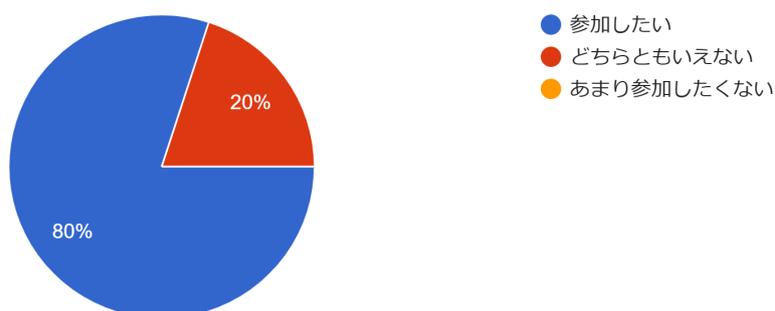
フォローアップ講座に関する満足度調査（回答 5 名）では、「とても満足」60%、「満足」40%で否定的回答は 0%でした。また、講座内容の実践有用性およびプチセミナーの評価においても同様にポジティブ評価 100%、トップボックス 60%となり、平均評価は約 4.6（5 段階相当）と高水準です。

フォローアップ講座の意義

受講者の回答から、①個別相談を通じた具体的授業設計の示唆獲得、②専門学校教育への学術的関心への評価、③「ブルーカラーの時代」という社会的使命感の醸成、④キャロルの時間モデルに基づく学習時間保障の視点、⑤「効果・効率・魅力」を意識した分かりやすい授業設計の重要性、の 5 点に整理できます。共通する学びは「学生理解を前提とした授業設計の再定義」です。示唆として、理論提示→個別相談→自校文脈への転換という設計が有効であり、今後は具体的実装事例の共有と実践伴走を強化することで、理念を行動へ定着させることが重要です。

今後このようなフォローアップ講座に参加したいと思いますか。

5件の回答



今後への希望として、①教材研究や授業設計に関する実践的研修の充実、②成功事例の研究・発表機会の継続的設定、③他校事例共有と自校へのフォローアップ強化、④低学力者・欠席がちな学生への具体的対応策の提示が求められています。また、地理的制約を超えた交流機会の価値や、第一人者から直接学べる場への高い満足と継続参加意向も示されました。示唆として、専門的講義 + 事例共有 + 交流機会を組み合わせた継続型プログラムを設計することで、実践定着と横断的ネットワーク形成をさらに促進できると思われます。

第7章 今後の展望

研修1～3を通じた参加者アンケートでは、「やってよかった」「活用したい」「自分に関係があった」「やりがいがあった」等の設問で平均8点前後の高評価が継続しており、研修設計は参加者の実務課題と強く接続していたことが確認されました。特に活用意欲は9割超が肯定的回答を示し、動機づけ形成の面では十分な成果があったと評価できます。また、学校間交流やグループワークを通じた相互刺激により、視野拡張や自己の授業改善を客観視する契機が生まれ、組織的改善への意識醸成が進みました。

一方で、「学習を着実に進められた」「自信がついた」「自分なりの工夫ができた」など実装・定着段階に関わる設問では平均値が相対的に低く、ばらつきも見られました。これは理解や納得の段階から、具体的な行動への移行において追加支援が必要であることを示唆します。

フォローアップ講座の分析では、再集合による振り返りと実践共有が自信形成や実装確度の向上に寄与しており、継続的な伴走支援の有効性が確認されました。また、事前の上司アンケートでは、受講者に対し「組織的授業改善の推進役」「他教員への波及役割」を期待する回答が多く、個人研修にとどまらない組織成果への期待が明確でありました。

総合すると、本研修は動機づけと方向付けには成功しており、今後はフォローアップ体制を強化し、個人の学びを組織的実践へと定着させる仕組みづくりが重要であると思われます。

2026年3月発行
一般社団法人 全国専門学校教育研究会
URL : <http://www.zsenken.or.jp/>

●本書の内容を無断で転記、掲載することは禁じます。